

---

# とある良運の気空操動

スラフィア

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある良運の気空操動

### 【Nコード】

N8110H

### 【作者名】

スラフィア

### 【あらすじ】

気空操動という珍しい能力を持つ少年と、科学の力で創り出された量産型能力者の少女。外部・内部協力機関、またしてもウィルスコード……。幾多の思惑が交差する時、物語は始まる。 (という感じで)

この物語の時期は、原作8巻前後としています。

## #1 気空操動 Sky | direction (前書き)

あまり寄り道はしないようにという点、あと見やすいように「話」話を短くするように心がけます。

それと「良運」も「気空」も「操動」も、単語としては滅茶苦茶です。

最後に。この章はプロローグ兼ねてますから説明多いですけど。頑張って乗り越えてください。

## #1 気空操動 Sky direction

スカイディレクション  
気空操動。

この能力を有する者は、230万人もの人口を抱える学園都市でさえ、ごく僅かと言われている。

何故珍しいと言われるのか。

スカイディレクション  
気空操動はよく、風使いの能力者と間違えられることがある。が、この二つの能力は根本的なところが違う。

たしかに分類上は風力使用であっているのだが、風使いがその名の通り「風」を操る能力なのに対し、スカイディレクション「素粒子」レベルで空気を操る能力だ。そのため、たとえコンクリート製の壁であっても、顕微鏡で確認できないほどの小さな通気穴さえあれば、内側から粉々にすることも出来る。局地的な真空状態だつて作れると言われている。学者達の間で、もしかすると、実はまだ解明されていない素粒子の内部の『何か』を操ってるのかもしれないと示唆される、貴重な研究材料でもある。

スカイディレクション  
そして操るものが小さく大量にある気空操動では、普通の風使いの能力よりも必要な演算の数が半端ではないのである。半分寝惚けて授業を受けていられるような「普通の生徒」に処理できる演算のレベルではない。

そもそも発現の度合いも違う。

スカイディレクション  
風使いの能力なんて、そんなに珍しいものではない。一学校に1人くらいは大抵いる。ただし、そのなかでスカイディレクションの能力を持つものは5人もいないだろう。

単純に言えばスカイデイレクション気空操動は学園都市の多々ある能力の中の風使いの中でも、高位の能力、だから珍しいのだ。

そして、この能力を取得していて、なおかつ大能力者（レベル4）である時点で、なほはせいと榎橋誠斗は運の良い人間なのだった。

くるくるくるくる、ピッ、ピッ、ピッ

オメデトウゴ

ザイマス

「……………待ってくれ」

何の変哲もない自動販売機を前に、榎橋は1人呟いた。

榎橋にこう呟かせる原因は、この自動販売機だ。自動販売機のおくまで“おまけ”のもう一本当たるかもよスロットが、さっきからずっとずっと連チャンを続けている。

運良く揃ってもう一本ジュースが出てきたのには、おやラッキーと思った。そこでラッキーと思ってしまったことは認める。だが、だからといってそれを引き金にさらに連鎖して揃ってくれても嬉しくない。もっか、閉口する。もう眺めるしかない。

「……………頼むから止まれ」

本当に止まって欲しい。

別に、当たらないと蹴り飛ばしてぶっ壊すぞ、とか念じて硬貨を投入したわけでも何でもないのに。ただ、なんだか暑いなーと思っただからジュースを買って飲もうとしただけなのに。

もう一本当たるかもよスロットなんて、くだらないおまけを付けるから悪いんだ、と檜橋は思う。

その便利すぎて笑いが止まらなくなっちゃうサービスを廃止するか、それかジュースが取り出し口に出るたびにスロットが回る仕組みではなくて注文ボタンを押した時に回る仕組みに換えるとか。

その気になれば、能力ちからを使ってジュースが落ちる道の空気を固め、詰まるようにしてやれば当然ジュースは出てこなくなり連チャンは止まるが、能力を解除した瞬間に落ちてきて、どうせまた連チャンが始まるに違いない。この予想は誰が聞いても「その高い鼻へし折ってやるうか」的な展開に発展しそうだが、生憎と真実なのだから仕方ない。

まああれこれ考えたところで、檜橋にはこの連チャンが止まるのを待つしか手が無いのだった。

15、レンチャン                      キョウセイシュウリョウ

強制終了にて、やっと、連チャンが止まった。

おもわず、はーっと安堵に似た溜息が出てしまう。

見れば、出てきたジュース缶はなんと15本。……できればそうすることで全部消え失せないかと願って目をよく擦って再度確認しても15本。

とりあえず取り出し口からは出しておいたが、全部この場で消費

するわけにはいかないし、これをとにかく持って、学生寮に置きに行くなり誰かにあげるなりしなくてはならない。

一石十五鳥で実質1500円分以上の得なんて、傍目に見ればこの人はなんて幸運なのだろうと思うかもしれないが、こんな小さな幸せが溢れる日常に檜橋はほとんざりしていた。

自分の幸せは幸せとは言えない。なんだって好き好んで15本のジューズ缶の後始末をしなくてはならないのか。

幸運というものは、必ず不幸と対になっている。不幸の後は幸運が来て、幸運の後には不幸が来る。これが世の中の持ち回りつてものだと檜橋は若くして悟っていた。

誰か代わって欲しいと、檜橋はさつきと違う意味の溜息を漏らす。

(まあなんですか、15連チャンで強制的に終わるようなプログラムを設定してきてくれたことだけにだけは感謝します神様)

とりあえず当初に買う目的だったジューズは飲み干し、缶をゴミ箱へ捨てる。

さて、この14本のジューズたち。……どうしたものか……。

檜橋誠斗は学園都市のとある、「普通より少し上」クラスの中学に通う3年生。後ろ髪がピンピン尖っていたりいなかったり、髪があちこちびんびん立っていたりするのは、スタイルではなく単に寝癖を直したりしないからだ。着用の服は夏用の長い学生ズボンに長

袖の白いYシャツ。ごくごく普通の格好である。

中3となると、外の世界では進路について真剣に考えなければならぬところだが、学園都市では違う。成績も関係するが、能力の強さもかなり重要なポイントとなる。つまり能力レベルが高いと断然進学に有利となるのだ。

檜橋の能力レベルは大能力（レベル4）。大能力者（レベル4）ほどの能力があれば、公立高校なんかには普通に入れる。やれ面接がどうの、筆記試験がどうのなんて騒ぐのは、杞憂と言える。

この学園都市と呼ばれる地域は、東京西部の未開拓地を一気に開拓して作られた、東京都の3分の1の面積を持つ学生の街だ。名前だけ聞くと、成績優秀なガリ勉どもが集まって学業に励む場所の様にも思えるが、それは違う。

というより、その逆だ。学園都市には、落ちこぼれの無能力者（レベル0）が230万人のうちの6割を占める。優秀と呼ばれる超能力者（レベル5）や大能力者（レベル4）は、無能力者（レベル0）たちの半分にも満たない。

さて、この無能力とか超能力とか、それはいったい何なのか。

端的に言えば、『能力の強さ』だ。

能力には、バイオキネシス発火能力やテレポート空間移動など、多種多様な種類がある。それは、発現する能力が個人の資質により変わってくるからだ。中には、学園都市の中の1人にしか使えない能力もある。

では、能力とはなんなのか。

ラム実はこの学園都市では、「暗記術」や「記録術」といった時間割カリキュ



りが一般の科目と一緒に組まれている。

これは、催眠や暗示、投薬に生体刺激などの方法で、人為的に超能力を開発してしまうという、ぶっ飛んだ授業だ。そして発現するものを能力と言い、精密機械で検査して能力の強さを調べた結果がレベル0〜レベル5まででランク付けされる。

この街の学生の大半が、レベル5になるという夢を持っている。それは檜橋とて例外ではない。しかしそれはあくまでも『夢』だ。どんなに頑張っても越えられない壁が、確かに存在する。最高位と言われる超能力者（レベル5）になれたのは、学園都市でもたった7人。大能力者（レベル4）まで上れた檜橋は、幸運な方なのだ。

まあ、超能力開発の目的は超能力自体では無いという話だが……。

檜橋は自分の能力の希有さ、能力レベルのそこそこの高さを、特に小さい子供の頃は少し自慢気に思っていた。ただ、その恵みがこれだから、最近は能力レベルなんてどうでも良いと考えるようになった。

そう、あくまでここは巨大な学校機関。

外の世界と同じように、勉強して友達を作って青春して過ごす場所なのだ。

少なくとも、今はそう思っていた。

「さーてさて、どうしよっかなこれ」

地面に鎮座するジュースたちを見て眩く。見つめていると僕を私を拾ってえと訴えられるような錯覚に遭う。

もともと捨て行くつもりはないが、いつまでもここに置いておくとそのうちジュースたちの方に愛想尽かされそうなのでさっさと持つことにした。

冷えたジュースは冷たい。

なにを当たり前な事と言うかもしれない。だが実際の感想としてとてつもなく冷たい。頭や背中では尋常でなく暑いのに腕の周りだけ極寒の域となっている。

「図書館のホットコーヒーはあったかかったなあ……」

そう、檜橋はさつきまで図書館にいた。学校で出された宿題を済ませるために、利用していた。ついでにその図書館とは檜橋の中学の所有する施設で一応は学校の敷地内にあるため、鞆は寮に置いてきてあるのに制服を着ていたわけだ。

その図書館では飲み物の持ち込みがオーケーなだけでなく、中で販売もしている。そろそろ涼しくなる時期だというのに冷房がよく効いていて涼しかったのでホットコーヒーを買ったのだ。そういえば開館日記念とかなんだかでお代わりが無料ただだった。

「その代償に冷え冷え派の恨みを買ってしまったって訳か……」

ぼーっとしていると腕の中からジュースのひとつが抜け落ちそうになる。落として漏れはじめでもしたら最悪なので、檜橋は気を引き締めた。

しばらく温度下げ輩どもと格闘しながら学生寮までの帰り道を歩いていくと、ふと前方のコンビニから喧騒が聞こえてきた。何事か

と思つてえつちら近付いてみる。

中では、コンビニの従業員姿の人と、チャラチャラした鎖の付いたジーンズを穿いている金髪の人が言い争っている。

なーにやつてんのかなー、不良息子と頑固親父のリアルドラマかなーとか極めて適当に見ていた檜橋だが、やがて事の次第が理解できた。

万引きだ。

いや、泥棒というのが正しい。能力者は万引きなんてけちけちした真似をしなくても、己の力を使い正々堂々と（言い方は変だが）物を盗むことが出来てしまう。学生の街といえど、働き手は大人。特別な力を持たない大人を見下す能力者もいる。希に能力者を素手で瞬殺してしまうような大人もいたりするが、それはあくまでも希なので出会えるチャンスすら少ない。

その点が、この学園都市で少年犯罪の起きやすい理由だ。

店の中では、店長らしき人と万引き犯が争っている。危惧する間もなく、すぐに店長さんは万引き犯の放った衝撃波らしきものに直撃された。それは一瞬の事で、どんな能力なのか檜橋にはいまいち理解しにくかったが、確実に人を気絶させる効果があることは理解できた。

「って事は最低異能力者（レベル2）以上だな。あー、このジューズたちどうしたものか」

とりあえず優秀な生徒で正義の味方の檜橋は、助けに加勢したいところだが、ジューズたちを持ったまま登場するわけにはいかない。仮に向こうも大能力者（レベル4）だった場合、指先だけの使用で

渡り合える自信はない。

ジューズを持ったまま榎橋がまごついていると、突然、その隣を何かが高速で駆け抜けていった。

ぱつと見ドラム缶が進化して近未来ロボットっぽくなった変な物。パトカーみたいに一人前に赤色灯を光らせている。

警備ロボ。

「風紀ヲ乱ス行為ヲ確認！ 犯罪者ノ確保ト共ニデータノ徴収ヲ！」  
ビイイイイイと警報を鳴らしながら、店内に飛び込む警備ロボ。ちつと舌打ちする万引き犯の声。

警備ロボ自体にはそれほど戦力はない。たとえ低能力者（レベル1）相手でもぼこぼこに返り討ちを食らうのは警備ロボの方だ。ただ、警備ロボが犯罪者の顔写真を撮って風紀委員の詰め所や警備員の詰め所に送りでもすれば、あつという間に学園都市全土に指名手配され、逮捕or補導は確実となるのだ。

もっとひどい犯罪の場合、学園都市の対侵入者攻撃が作動して無人攻撃ヘリが出動することまである。

「どけ、そのクソガキ！」

コンビニの中から万引き犯が飛び出してきた。相手は高校生らしき不良なので榎橋がガキに見えてもあながち間違いでないかもしれないが、不良の分際で優等生に向かってクソガキは無いと思う。

榎橋が動く気にならないでいると、さっきと同じ危険な衝撃波が

飛んできた。

周りの空気を固めて見えないバリアでも作れば簡単に防げたはずだが、今の櫓橋は両手が塞がっているし腕いっぱいには抱え込みジュースだして思わず後ろへ飛び退った。

だがそれは間違いだった。

慣性の法則の発動と飛び退った反動で、ジュースたちが飛び出す。あつと言つ間もないまま、地面に放り出されて叩きつけられるジュースたち。

グシャっていった。グシャって缶が缶がグシャって鳴ったよ今！

歩道に散らばったジュースたちの中に、「黒豆サイダー」が混じっていた。確かめなくても中は沸騰よろしい状況なのがすぐ分かる。これ寮に持ち帰っても開ける前に即処分ですね。いくら何でも部屋の中で黒い噴水を楽しめるとは思えませんので。

「おい不良！ その万引き犯の不良！ このジュースたちどうしてくれるっていうんだっておい逃げてないで聞けー！」

一連の黒幕である万引き犯の逃走する背中に向かって、櫓橋は大声で叫ぶ。「知るか！」と律儀に応えが返ってきた気もするが、どっちにしる逃げられていなくなってしまった。逃走者の後を追って警報を鳴らしながらすっ飛んでいく警備ロボが視界から消え、音が遠ざかっていくと、あたりは唐突に静かになる。微かに、コンビ二の中から店長を心配して名前を呼ぶ店員の声が聞こえてきた。

残されたのは櫓橋と散らばったジュースたち。

もう一度、散らばったジューズたちを絶望の目で見る。“幸運”にもひとつとして漏れている缶は無かったが、それはすなわちこの場で捨てれず全部持って帰ることを意味している。

「なんでこういう目に遭うんだよ……」

可哀想な目に遭ったジューズ缶たちを前に、同じく可哀想な目に遭った櫓橋は何度も何度も溜息をつく。

と。

カツツと、歩道を歩いてきたらしい、櫓橋の後ろからの靴音が聞こえた。続いて櫓橋に向けられた平淡な声が聞こえる。

「手を貸しましょうか、とミサカは最近の少年はどうして大量のジューズをばらまくのが得意なんでしようと溜息をつきつつ提案します」

「……？」

後ろを振り向いてみると、そこに常盤台のお嬢様が立っていた。

この人は……御坂美琴だ。

白い半袖のブラウスにサマーセーター、灰色のプリーツスカートという姿は、学園都市でも5本の指に入る名門私立校、常盤台中学の標準装備。そしてこの人は肩まである茶色の髪に髪留めをつけ、化粧が必要ない程度に整った顔立ちをしている。

実際に今まで会ったことは無かったが、噂話なら何度も聞いていた。なにせ7人しかいない超能力者（レベル5）の第3位、電撃使エレクトロマスタ。

いの頂点、超電磁砲だ。知らないはずがない。

なんか右手に戦闘用ゴーグルを提げているところとか、変ちくりんな喋り方は予想していたものと違ったが気にしないことにする。

しかしこの超能力者（レベル5）の御坂美琴さんが自分に何の用なんだろうかと檜橋は首を傾げる。

「手を貸せばいいのか貸さなくてもいいのかはつきりしなさい、とミサカはいつまでも返答が無いあなたの態度に若干怒って告げます」

「……あの僭越ですが、あなたは常盤台の超電磁砲の御坂美琴、ですよね？」

あまりにイメージとかけ離れているので聞いてみた。だが、御坂美琴らしき人は「？」と少しの間を置いた後、

「いえ、ミサカはミサカです。御坂美琴というのはお姉様の事です  
か、とミサカは聞き返します」

と逆に質問してきた。

へー、超電磁砲には妹がいたんだー、と檜橋は新しい知識を得た。無論、知り合いでも何でもないのだから妹がいたところで別に感想も浮かばないが。

御坂は御坂という名字だろうから言っていることは分からなくもないが、姉妹でこんなにも似ているのに御坂と名字の方を一人称に使うこの人に檜橋は少しの違和感を持った。

「はあ、でその超電磁砲レールガンの妹さんが何の用でしょう？」

「あなたは人の話を聞いていないのですか、とミサカはさつきより怒りのゲージを上げて尋ねます。この半径3m以内の領域にはジュース缶が大量に転がっています。とにかく歩道にジュースをばらまかれては通行人の邪魔になりますので早く片付けてください、とミサカはあなたに命令します」

なんだか知らないけど怒られているらしきことは理解できたので、櫓橋はすずごととジューズたちを拾いにかかる。

元はといえば万引き犯が悪いんだけどなあ何で俺がとばかり受けるのかなあとぶつぶつ呟きながら。

「口の中でもごもご呟いていないで言うことがあればミサカに直接言うてください、とミサカはミサカもジューズを拾いながら促します」

「え？」

見れば、ミサカさんとやらは一緒になってジューズを拾ってくださっている。

途端に櫓橋は申し訳ない気持ちになった。歩道にジュースばらまいて通行の邪魔をした上にただの通りすがりの常盤台のお嬢様に拾うのを手伝わせるなんて、端から見れば俺ってどんな人間に見えるだろうと櫓橋は真剣に恐怖した。でもいけないのはあの万引き犯なんだけどなあと心の底で思いながら。

「……あー、ごめんね手伝わせちゃって」

「謝礼の言葉をいただくよりはさっさと拾ってもらった方がミサカ



としては楽なのですが、とミサカは正直に言います」

さくり、と。正直な台詞は時に残酷な刃物となる。

「……あのさ、もう少し優しく言えないわけ？　なんか自動販売機拒絶症になりそうだ」

「？　自動販売機が散らかしたわけではないでしょう、とミサカは確認します」

「そうですよー自動販売機のせいですよー」

「その投げやりな調子の言葉は逆の考えを裏付けするものだ」とミサカは個人的な見解を述べます。　そしてこのジュースはいつたいどこまで運ばよいのでしょうか、とミサカはこの冷たいジュースを手放せるならさっさと手放したいと思いつつもそんなことはおくびにも出さずに問いかけます」

思いつきり前面に出してるよな、と檜橋は呆れる。

だがこの人工冷却物みたいにやたら冷たいジュースをいつまでも女の子に持たせる気は檜橋としてもさらさら無いので、拾ってくれたお礼だけ言ってジュースを受け取るうとした。

「それで、このジュースはいつたいどこまで運ばよいのでしょうか、とミサカは問いかけます」

「え？　いや、そんなことしてくれなくてもいいよ結構です」

「このジュースはどこまで運ばよいのでしょうか、とミサカは再度問います」

「え？ だから拾ってくれただけで十分だって感謝してますから」

「このジューズはどこまで運べばよいのでしょうか、とミサカは再度の再度問います」

「だから運んでくれなくてもいいってば」

「このジューズはどこまで運べばよいのでしょうか、とミサカはいつまでもはぐらかしてないでさっさと答えるこの野郎と念じながら再三に渡って問いかけます」

「……」

どうして自分の僅かな遠慮と気遣いに気付いてくれないのだろうか、と檜橋は恐れに似た感情を抱く。

はぐらかしているつもりはさらさらないというのにもしかしてこの人は融通とか効かないタイプ？

「……強いて言うなら俺の腕の中まで運んでいただけると」

「ミサカはようやく目的を得られたことに満足します」

そう言うつと、ミサカはいきなりずん、と檜橋の方へ踏み出してきて、腕の中にジューズを落としてきた。

「……！？」

その行為自体に問題があるわけではない。別にもともと自分が落としたジューズだし自分で運ぶと言ったんだしわざわざ拾ってくれ

た子に対してどかどか落とすなと文句を言う気はない。

しかしなんととっても、超至近距離。

「……ちょ、あの……近いです」

「何か？ とミサカはあなたの顔を見て尋ねてみます」

顔まで上げられるともはや間隔は10cm未満。目と目が合うしかないこの状況に檣橋は知らない間に必死の自己制御をかける。

いやーそれにしても初見の常盤台のお嬢様相手にこんなに何の気無しに近付いてこられた人って俺が初めてではないでしょうか。

それでいて「？」と若干不思議そうな無表情を見せるミサカが今はとにかく接近戦の敵だ。

「何をそんなに緊張しているのでしょうか、とミサカはあなたの心理状態に再び疑問を抱きます」

「どこまで無感情だとそんな単純な事が分からないんだ」

「ミサカに理解できないものはミサカにだって理解できません、とミサカは諦めることにします」

よく分からない台詞と共にミサカがジューズ缶移動を終えて後ろに下がった瞬間、不覚にも檣橋はふにゃーとした感覚に襲われて全身の力が抜けてしまった。足は辛うじて突っ張れたものの、腕は。

ガラガラガラドドドドと打楽器のような騒がしい音を立て、せつ

かく拾い集めたジューズが再び地面に転がる。もう中身は期待できなくなっているに違いない、というか缶が変形している。

「……………」

「ちょ、待つてこれは落としたのは俺だけとおまえにも少し原因あるんじゃないのかって　あー分かってる悪いのは俺だけだからそんな目でこっち見るな頼むから目を逸らせー！」

「……………早く拾いなさい、とミサカは要求します」

「言われなくても拾うっていうかなんでこんなにぼっこぼこにへこんだジューズ持って帰らなきゃいけないんだというか、はあ、やっぱり悪銭身につかずって言うしな　」

「……………早く拾いなさい、とミサカはいい加減にしないとぶっ殺すぞと本気の脅しも込めてあなたに命令します」

「じゅめんなさい」

本気で危険な雰囲気を感じて即座に謝る。

「謝罪だけでは解決になりません。ミサカは速やかな回収を要求します」

「御意」

やはり危険なオーラを漂わせているミサカを前に、櫓橋は従わざるを得なかった。

再びいちいち拾っていくのは面倒だ。それに、ちんたらやってんじゃねえ！！とミサカに怒られるかもしれない。ならば、どうするか。

回答。ここで能力を使います。

両手が空いたため、地面の散らばったジュースたちに手を翳す。

するといきなり、カクン、と軽い音を立ててジュース缶たちが一斉に宙に浮かび、そしてそのまま腕の高さまで上昇した。

正確に言うと缶の下側の空気中の分子を上に移動させ、側面の分子は回転させ、上側の分子は抵抗を最小限に抑えて下へ移動する、という一連の流れを檣橋は制御している。分かりやすく言うと、落ちていく物体の空気抵抗みたいな現象を逆に起こしているわけだ。

この能力は空間移動テレポートなどと同じようにとてつもない演算を必要とする。

空気の素粒子一つ一つまでの正確な計算が求められる訳だ。それはこの小さな半径の地域だけだから簡単に行えるが、学園都市最高のコンピューター、『ツリーダイヤグラム樹形図の設計者』はその上を行く演算を行っている。なにせ世界中の空気中の原子の一つ一つの動きを予測しているのだから、もう必要な演算は天文学的数値に上る。

超能力者（レベル5）になるためには、最低でも一市町村全体の空気素粒子を演算できる頭が無くてはならない。

浮かんだジュース缶たちを今度は水平に移動させ、結局檣橋は一歩も動かないまますべてのジュース缶を腕の中に納めることに成功した。能力を使っているうちにちゃんと腕の感覚が戻っていて良かった。ここでまた落として水風船みたいに破裂させてしまったらその後が大変になるところだった。いや、その前にミサカにぶっ殺さ

れていたかも。

「念動力テレキネシスですか、とミサカは初めて見た能力に多少感心しながら尋ねてみます」

「いや、スカイデイレクション気空操動でいうんだけど知ってる？ 常盤台でも珍しいんじゃないかなあ」

「……ミサカには常盤台中学の生徒の事はよく分かりません、と正直に告げます。それにしてもこんなに便利な能力使いだっただのであればわざわざミサカが手伝わなくてもよかったのではないですか、とミサカは不満を露わにします」

そつちが勝手に手伝ってくれたんだけどな、と檜橋は心の中だけで呟く。

そんな檜橋の思考回路を露ほども知らないミサカは、

「必要性が皆無であるのに無駄な労力として手伝わされたミサカは不機嫌なので帰ります、とミサカは本当に帰ることにして歩き去ります」

と言って、何か声をかける前に檜橋の横を通り過ぎてそのまま歩いて行ってしまった。

## #1 気空操動 Sky | direction (後書き)

原作の表現や書き方を用いている箇所がいくつか出てくるかと思  
います。

気付いたらば、「ああこれ見たな」なんてニヤついちゃってくださ  
い。

## #2 学生寮 Student Residence

あちこちへこんだ缶ジュースを腕いっぱい抱え、榎橋はなんとか自分の学生寮に帰ってきた。

もともと単に興味単位の調べ物に出かけ、すぐに帰ってくるつもりだったのだが余計なおまけを抱え込んでこの有様だ。いったい誰がこんなものを幸運と呼ぶのだろうか。

一旦ジュースたちを廊下に降ろし、部屋の鍵を開けて入り込む。

一歩玄関へ入った途端、むわ〜と夏の密室さながらの熱気が榎橋に襲いかかってきた。

「エアコン付けていけば良かったな〜」

榎橋の住む学生寮は5階建てのアパート。榎橋の部屋は2階の8番目の部屋、208号室だ。大して良い学生寮では無いと榎橋は思っているが、5階建てという低さになかなかの広さを誇るこの学生寮は実は結構レベルが高いところである事に気付いていないだけだ。

部屋に入ると玄関から直線の短い廊下があり、左右にトイレと、風呂への出入戸と脱衣所兼ね洗面所、奥に進むとドアで仕切られたリビングダイニングキッチンがある。ついでに一番奥にはベランダがある。

という、こんな部屋に榎橋は住んでいる。

「皆さんご乗車ありがとうございました、と」



リビングまで行き、両手のジュースたちをテーブルの上にどかどか落とした。もうこれ以上どうへこんだっていいやーみたいな投げやり感も多少含まれている。

ジュースたちは好きなだけ櫛橋から体温を奪い、ぬるい飲み物と化していた。

「ぬるいのって一番嫌なんだよな結局自動販売機に「あつたかい」と「つめたい」はあるのに「ぬるい」が無いのは詰まるところそういうことなんだよなー」

ぶつぶつ独り言を言いながら、では皆さん今度は冷蔵庫という所へご案内しましょうというノリで櫛橋が少しづつジュースを取り分けていくと、おや？ とジュースたちの中に一つだけ缶とは違う異物が混じっていた。

「……軍用ゴーグル？」

そんなもの拾った覚えは無いし、そんなものが自動販売機から出てきたという記憶も無い。しかしそういえばあのミサカミサカ言っていた子は、確か右手にこれを……。

「あー、これさっきのミサカって人のか」

おそらくあのミサカさんはジュースと一緒にこのゴーグルまでも櫛橋の腕の中に落としたのだろう。それで櫛橋も気付かず落ちたものの全て拾ってここまで持ってきたと、そういう事か。

どうして常盤台制服のお嬢様が軍用ゴーグルなんて持っているのか気にかかると言えば気にかかったが、それとこれとは別問題なの

で今度会えた時にでも返そうかなーと思い、だったらどこに置いておこうかと檣橋はゴーグル片手に立ち上がった。

ピンポーン

と、古き良き懐かしきの見事なまでのチャイム音が響く。なんだろうな郵便かな配達かな新聞の勧誘かなそんなもん勧誘される気はねーぞと一通り予想と対策を立て、檣橋は軍用ゴーグルを片手に玄関の戸を開けた。

するとそこには、さっきのミサカが立っていた。

「あ

「押しかけて申し訳ないのですが、とミサカは最初に断っておきます。コンビニの前でジュースを拾った後<sup>のち</sup>気がつけばミサカの暗視ゴーグルが無くなっていたのですが、あなたは知り

つらつらと説明しかけて、ミサカの視線が檣橋の持っているモノに移る。それにつられて檣橋も視線を落とす。

その手にはゴーグル。

無言で視線を上げてくるミサカ。無表情のままでも、睨まれているような感じがして落ち着かない。

いや……泥棒ではないですよ？

「これ、ジュースの中に混ぜたってんだよ。ちょうど良かった、どうしようかなと思っていたところだし。……にしても君、どうして俺の寮が分かったわけ？もしかしてストーリーカーさん修業でもした

の？」

「ストーカーではありません、とミサカは失礼な疑惑を解消するために指を指します」

あらぬ疑いをかけられて少しムツとしたようなミサカは、この部屋に続く廊下を指指した。

そこには、点々と続く緑色のジュースの液漏れが檜橋の寮を教えている。緑の滴はとある有名怪獣の血を連想させなくもない。そう、警察が殺人や殺人未遂の犯人を追跡する時には返り血の跡を探ったり、もし手負いでもしていればその犯人の血の跡を追いかけるという手段がある。

「ミサカはその跡を追ってきただけです、とミサカは説明しながらそれとなくストーカー扱いされたことについての謝罪を求めます」

「う、あの緑濃さからしてガラナ青汁かなんか……。くそーやっぱり漏れていたんじゃないか……。ゴーグルを渡す手間が省けた代わりに家の中に青汁の滴ってわけですか」

うわあぁんと叫びなくなる衝動を抑えて振り向くと、さっきは気付いていなかったが玄関から廊下まで緑の点滴が途切れることなく続き、そのフィニッシュはリビングに至っていた。

謝罪要求が通らなかったミサカは少しだけ不機嫌になった。ようにみえる。

「一応言っておくとあなたがあの時理由もなくジュース缶を落とされたのが原因かと思われ、とミサカは客観論を述べます。もともとコンビニ前で落とされた時にへこんだ傷の淵に再び衝撃を加える

ことによつて」

「あーあー分かつてるから言わないで！ さつさと部屋の中の青汁拭かないと臭いが大変なことよー」

玄関を開けっ放しにしたまま、櫛橋は慌ただしい動きで部屋の奥へ消える。と思つたら雑巾を持つて床拭きを始めた。意外にもなかなか鮮やかな手つきである。1人取り残されたミサカは、そのまま帰ってしまったて良いのか判断に迷い、妥協策として廊下の掃除にやつてきた清掃ロボに興味を持ったふりをして眺めた。

この軍用ゴーグルは、はっきり言つてしまえばもうミサカには必要ない。彼女は一方通行の絶対能力（レベル6）進化実験シフトのために生み出されたクローンであり、このゴーグルも元はといえばそのためのもの。実験計画が凍結した今となつては、もう必要のないものはずなのだ。

彼女（正確には彼女達）は通称『妹達シスターズ』と呼ばれる、学園都市の超能力者（レベル5）第3位の御坂美琴のクローン体だ。なんと2万体的に近しいのだが、半分以上は絶対能力（レベル6）実験により殺されてしまった。

実験が凍結したのは、ある少年の働きといえる。それによりミサカ10032号を始め、残りの妹達シスターズは救われた。投薬により細胞が急速な成長をしているミサカたちは、学園都市の外や中やとにかく至る所の機関で体の調整を受けている。

このミサカも、同様に体の調整を受けている、はずだった。

しかし実際の話、未だに調整は受けていない。

どうしてかと問われても、ミサカは明瞭な答えを出せない。

最後の実験となった10032次実験では、あの少年はミサカに向かつて確かに言った。「お前を助けに来たんだ」と。ミサカだってその言葉に何も感じなかったわけではない。その少年の言葉は、確かに胸に響いた。しかし、あの場で少年が言った「お前」は、ミサカ10032号のことだ。自分は検体番号シリアルナンバー12057、いくら姿形が似ていようと、あの少年の言葉は自分に向けられたものではない。

他の妹達シスターズはそういう風に考えないらしい。直接話さなくても分かるのは、妹達シスターズの脳波は互いにリンクされ、他の個体の記憶や思考が分かってしまうからだ。

最近の自分の思考は、ほかの妹達シスターズと少しずれている、とミサカは自分でも思う。グループに所属したのはいいが、他の人は馬が合わない、みたいなの。

本当は思考のずれなどあり得ないはずなのに。同じように生まれ同じように同じ内容を学習装置で強制入力された妹達シスターズ、脳波が同じ種類で一定な妹達シスターズに、思考のずれなど、あり得ないはずなのに。

それにこうして調整を受けないのは、自分の意地でしかない。自分の我が儘でしかない。命まで張って助けてくれたあの少年に申し訳が立たないことをしていると、ミサカは自分でも分かっている。分かっているが、どうしても目的を見出せない。

もし自分にも、ミサカ12057号のことを1人の人間として見てくれる人がいたとしたら、この自分勝手な気持ちは収まるのだろうか。

(あまりくよくよと悩まないことです、と10942号は一応あなたの姉として励ますつもりを声をかけます)

頭の中からいきなり声が聞こえてきた。

といつても驚くことではない。お互いの記憶や思考を共有できるシステムはミサカネットワークといい、クローンなのでミサカたちの同じ脳波と微弱な電波を利用して繋がっている、ひとつの巨大な脳と化している。それを使うと今のようにメッセージが送られてきたりする。

今現在、ミサカネットワークを使って世界中のミサカと意思の疎通が出来る状態だ。

(しかしミサカ19090号も最近悩み事ばかりです、と19090号は暴露します。医者に確認してみたところ異性に好かれるためには痩せていることがいいのではないのかと言われてそのダイエット法で迷っています、と19090号はこの上なく正直に告げます)

(……19090号の言う医者とは、あのカエル顔の先生のことですか、と10032号は確認を取ります。10032号もあの方に世話になっていますが、あの先生は腕は最高でも異性関係の知識となると趣味嗜好の混じる偏見傾向になるそうです、と10032号は看護婦さん筋の情報を伝えます)

(……19090号はさらに悩みの元が増加してしまいました)

(現在フランスにいるミサカ18222号はお医者様に、そういったものを“個性”と呼ぶのだと教わりました、と18222号は学習内容を繰り返します)

(ですが何よりも12057号は早く調整をお願いするべきです、と1 )

プツッ、と。ミサカはミサカネットワークから遮断した。

どうせ向こうが呼び出そうと思えばすぐに呼び出されてしまうものだが、ミサカはお説教を受けるつもりはなかった。

馬鹿なことをしているのは自分でも分かるし意固地になっているだけなのも分かるが、なぜ自分がそうなるのかは……。

「分かりません、とミサカは自分の心理状態に疑問を抱きます」

自分にも聞こえないくらいの小さい声で、ミサカは呟く。  
その台詞も、皮肉なまでに他の妹達シスターズのそれと同じだった。

前はこんなにも悩まなかった。考える事態に遭えば、自分の取るべき最善の道を模索して実行する。迷いなどもなかったはずだ。

「……なぜ、ミサカには理解できないことが多いのでしょうか」

さっきよりは少しだけ大きい声で、ミサカは自問してみた。学校の先生なら一言で「思春期」と片付けるところだが、ミサカには想像すら届かないことだった。いくら考えたところで、もやもやした気分は晴れない。

「ふう。まあ踏んづけなかっただけ“幸運”ってことだよな」

声がした。

見れば、少年が手に緑色に汚れた雑巾を持って玄関に戻ってきたところだった。

櫛橋とミサカの視線が重なる。

「……あれ？ ミサカとやら、まだ何か用かね？」

「いきなりそこで隠居口調になるのは何のつもりですか、とミサカは指摘します。そして別に何も、とミサカは質問に対して返答します」

「なんだ、よく分かんないけど待っててくれたの？ 律儀だね」

「いえ、正確に言うとミサカはこのまま帰路について良いのかはつきりしなかったために止まっていたのです、とミサカは根の違う褒め言葉を撥ね除けます。差し支えなければこれでミサカは帰ります、とミサカ は……？」

軍用ゴーグルを頭に掛けようとしてそして帰ろうとしたミサカだったが、軍用ゴーグルを掛ける寸前で手が止まり、言葉も止まる。

「何か？」

怪訝そうに聞いてみると、ミサカはゆっくりこちらを見た。

その顔と目を見て、榎橋はじりっと後ずさった。

……絶対、睨んでいる。

何故睨まれないかいけないのか理解できないが、断言できる。表情は全く変わっていないが気配で分かる。

冷汗が吹き出たような気もする。

「……ここを見なさい、とミサカは強制します」

やがてミサカは軍用ゴーグルの一点に指を添え、ぐい、と押しつ



けてきた。

強制されてしまったので素直に従うことにして、櫓橋はミサカが示す一点を見てみる。

軍用ゴーグルは当然、水泳ゴーグルとは違って透明な見渡し部分がプラスチック製ではない。プラスチック製ではないということは必然、割れる。ごく自然に、落としただけでも。

そう、落としただけで。

ミサカが指しているのは、真新しい亀裂<sup>ひび</sup>。

「どうしたものでしょうか……とミサカは……」

「どうしたものかじゃねーよ！ おまえ絶対なんか黒いこと考えるだろほら体中から危険なオーラが出てる！」

「……それが分かるようなら何も言わなくてもいいですね、とミサカは確認を取りました」

「ちよ、勝手に進めるなってかおまえなんで『ました』って過去形なんだよ！」

「ミサカは弁償を要求します」

「無視かそしてやっぱり！」

だあー！ と悲鳴を上げる櫓橋。このとき、ミサカは某少年とこの少年をちよっぴり重ねて見ていたりする。

檜橋は両手で頭を、まるで頭痛がするかのごとく押さえていたが、  
疲れたように軍用ゴーグルを見た。

「それ絶対俺が壊した傷なの？」

「この罅割れは今朝はありませんでした、とミサカは不動の事実を  
突きつけます。今更ぐちぐち言い訳めいたこと言ってるな、とミサ  
カは諭します」

「諭しますって……」

「この場において諭す以外に適切な表現方法があるというならその  
意見を拝聴しましょう、とミサカは一応の姿勢を示しますが譲るつ  
もりはありません」

この人は喋りで人を落として楽しんでんじゃないかと檜橋は半分  
以上本気でそう思う。

まあ、こう言ってもミサカが引かないなら本当にあの時落として  
しまったのが原因かもしれない。もし違う原因だと発覚したら一発  
は殴るけど。

……という妥協策で檜橋は諦める。

「で、具体的にその軍用ゴーグルはどの店でいくらで売ってるので  
すか」

「？ この暗視ゴーグルは一般の店で手に入るものではありません  
が、とミサカは首を傾げます」

「だーからもう首を傾げますじゃねえよじゃどうやって弁償しろっ

ていうんだよ！ だいたいおまえは何故そんな一般入手不可の精銳品を持ってんだ！？」

「ですからミサカは何も、新品を買えと催促しているわけではありません、とミサカはあなたのズレた認識を戻します」

じゃどうやって弁償するの？ と榎橋も今一度首を傾げる。

「ミサカはビニールテープの出来れば透明なタイプを催促します」

「そんなんでいいの？」

「そんなのとはどういう事ですか、とミサカは問い質します。罅割れがこれ以上進行しないよう抑えることが出来ればミサカの勝ちなのです、とミサカは

「そんなんでいいの！？ ……はっ、危うく乗りそうになるところだった」

榎橋はぶんぶん首を振ってしっかり意識を戻す。

ミサカは「？」の状態でありながらも早くテープ寄越せと目で暗に語っている。

その視線を避けて、榎橋は少しだけ堅い表情に戻した。

「あのさあ、おまえには俺がそんなに軽い支払いで済ませる人間に見えるのか？」

「現に今乗りかかっていますでしたが、とミサカは信憑性の無いあなたの発言に笑止符を打ちます」

「笑止符ってなんだ」

「そもそもミサカはミサカが修復に満足できればいいのであって、あなたのプライド的信念はどうでもいいのですが、とミサカは正直に告げます」

「出ましたよ』どうでもいい』宣言。それを言えばすべてが治まってしまふ悪魔の台詞だって知ってるのかな？」

「話が逸れているのですが、とミサカは」

「だいたい俺はプライドがどうの言っているわけではなくて、単にビニールテープで補修された軍用ゴーグルつけている君の見栄えに懸念を抱いただけであるんだから」

「……話が元に戻る兆しすら無いのですが」

「というわけだからいくら確信に近く思える事柄であっても決めつけで宣言するのは良くな　わあ！？　なんか周りの空気が攻撃的にバチバチ言ってるんだけど　！？」

その後数十分間、檣橋の学生寮では、配電機に必要以上の電流が流れたために停電が起こったそうだ。

### #3 空中散歩 | Action | beginning

「……頭が静電気で帯電して大変なことになってる……」

ぼそりと呟いた榎橋。普段の彼は特に髪型など気にしないのだが、さつきすれ違ったクラスメイトに「何それスプレーでも使ったのー？」とあからさまに大笑いされて少しへこんでいる次第なのだ。

隣を歩くミサカは別に何とも思っていないようだが、やっぱり直してやるべきだったかなあと榎橋は頭を押さえながら考える。現に今も、榎橋は歩道で小さく注目を集めている。

こんな髪型になったのはこのミサカが先程いきなり放電したせいだ（そのさらに元を辿れば結局榎橋が原因なのだが）。推測するところ、能力レベルは異能力（レベル2）程度といったところか。電エレクトロ撃トモスター使いかなんかであることも分かったわけだが、嬉しくない。というか電撃エレクトロモスター使いならこの頭に帯電した電子をなんとかしてほしい。

ちらりと横目で見てみても、完璧無反応無表情である。

「ここまでくると嫌味に思える」

「？」

何ですか？ という風にこっちへ顔を向けたミサカだが、榎橋は何も言わない。するとミサカは再び前を向いた。

（しかしミサカも耐久力が無くなったものです、とミサカは溜息をつきます）

ミサカも、ミサカなりに少し反省している。いくら自分の話を聞いてもらえなかったからと言ってほぼ初対面に近い相手に感情的になつて能力を使って電撃散らすのは間違っていた。それは分かるし、横の少年は何も咎めてこないから余計に気まずい。

結果として二人の間には席替え初日のような空気が漂っているのだった。

さて、この二人が並んで街中を歩いているのはちゃんとわけがある。

少なくともただの散歩ではなく目的がある。

大まかな話、ミサカの罅割れた軍用ゴーグルをビニールテープなんかではなくもつとしっかりと修理できるところに行こう、と櫓橋がミサカを引っ張っている、といったところだ。

たぶん当てがあるのだろうが、ミサカとしては本当にビニールテープの修理で構わないので本音ではさっさと帰りたかったりする。そもそも軍用ゴーグルひとつにこんなに拘るこの少年の考えもあまり分からない。

「会話が無いと暇ですか？」

「は？」

ふいに、少年が声をかけてきた。

「退屈だってそんな顔してるよ」

指摘され、ミサカは自分の頬に手を当ててみる。

自分で思う限りは表情はいつもと変わらない。生体電気の流れも脈拍数も至っていつも通りなのだが、本当に自分は退屈そうな顔をしていたのだろうか。

最も多く顔を合わせた研究者たちからも、いつも同じ顔だねと言われていた彼女の表情の変化など、もし仮にあったとしても、何故この少年に分かるのだろうか。

そんなミサカの思考回路など露知らず、櫛橋は続ける。

「歩いてるのがそんなに暇なら面白い話でもしようか。えー、昔々あるところにお爺さんとお婆さんが」

「桃太郎の話くらいミサカだって既知です、とミサカはあなたの紙芝居風語りを遮ります。というかこんな科学の国まちで桃太郎を持ち出すとはもう少しマシな話題は無いのですか、とミサカは呆れて溜息をつきます」

「これ桃太郎じゃなくて、『桃太郎くんの冒険』だから。学校で流行ってんの」

「……日本古来の昔話を冒流するのはやめなさい、とミサカは警告します」

「しかしここから先がどんどんヒートアップしていくのです、と燃え上がって説明します」

「無視ですか、それにどことなくミサカの喋り方を真似するのめやめてもらいたいものです、とミサカは」

「この喋り方って最初変ちくりんだなと思ったけど使ってみれば面白いものですね、と　　うわあだからいきなり電撃使うのやめろってほらもう真似してないから！」

バチンバチンと、あたりの空気が電気を帯びて鳴り出した。しまったまた行き過ぎてしまったあと頭を掻き回したい樫橋だが、そんな余裕は無い。

何一つ言葉を発さず怒ってますオーラを醸し出す電撃少女と、必死になって収めようとする髪型のすごい少年という対のコンビは、たちまち注目を集める。

『なにやってんのあの人達』

『というかこの往来で騒ぎを始めるなど、超神経が太いのか注目されることを望んでいるのかどちらかですね』

『結局さ、ウチらにとっては通行の邪魔なだけで』

『ひしひし人集りの向こうから信号がきてる………』

『あれ、って常盤台の制服じゃね？』

『確かに』

『あの常盤台中学生、どこかで見たことあるような気が』

『御坂美琴っばい』

『ウソ、あの第3位の超電磁砲の？』

『レールガン見えるかも超電磁砲！』

『バカ言ってるじゃねえよ俺達までみんなまとめて吹き飛ばされるぞ』

わいわいがやがや、あつという間に人が集まってくる。

そんな短い時間の間だが、人々に囲まれたことでミサカの怒り熱



は冷めた。

冷静になると、さっきの反省が反省になっていないと気付いてミサカはまた反省する。

だが。

「おわーすつごいなミサカ効果。統括理事長の演説もこれくらい人が集まればいいのにな。君つてば未来の電腦VIPって感じで  
あゝあ！？ だから抑えるもうしかも出てるのはカミナリ！？」

……冷めたのだが、少年の余計な一言によりまた上がる。

バツチンバツチン電撃を鳴らし火花を散らすと、慌てた少年の制止も聞かず、ついに抑えを外して一発放った。

ズドン！ と轟音が響いた。

おおーと観客やじうまが興奮の声を漏らす。

結構全力で撃ってしまったかな、とミサカは思っていたが、受けた当の少年はビビった顔こそつすれ、怪我はしていなかった。  
目に見える能力を使ったようには見えないのに。

ミサカよりも観衆はもつと驚いていた。それは仕方の無いことで、傍目では超能力者（レベル5）の攻撃をいとも容易く受け止めたように見えるのだから。

自分の能力レベルなんてたかが知られているが、ミサカは記憶を辿ってみる。

彼はさっき、コンビニの前で、自分の能力はスカイティレクション気空操動だと言って

いた。

あらゆる論理や知識を強制入力されたミサカでも、知らなかった  
インストール  
(あるいは存在が珍しくて忘れていた)能力、スカイディレクション気空操動。

そんな能力使いの彼は。

不意に、ミサカの頭にある疑問が浮かんだ。もし彼があの人と同じ超能力者(レベル5)で、絶対能力(レベル6)を目指す実験に被験者として参加したとしたら。

2000人もミサカ達を殺して絶対能力(レベル6)へと進フット化する実験を、彼はよしとするのだろうか。

「もしもし。困まれちゃったね出口無いしね」

少年の、内緒話のような囁き声に、ミサカは我に返った。

「ひよっとしたらサインとかせがまれるかもな。有名な超能力者(レベル5)にそっくりなあなたのことです」

「あなたはひよっとして楽しんでませんか? とミサカは不信感を露わにします」

返す。

「確かに否定はしませんが」

少年はアニメの動作みたいに、腕を組んでうんうんと数回頷いた。ミサカはもういちど電撃ぶっ放してやるうかとも考えたが思い留ま  
った。

「ですがまあ、スカイデイレクシオン気空操動という能力はこんな場面の逃走にも便利だったりするんだ。……でもパンツ見えるかもしれないから、押さえときな」

謎の言葉。どうしてパンツが見えるのか謎なのだが、少年は両手を翳した。

今から能力を使うと見える。

ミサカが何か言う前に、ふわりと、上昇するエレベーターに乗ったような浮遊感がミサカの体を包んだ。

そして、本当に上昇していた。

見えない力にぐいぐい引っ張られるというよりかは、地面が上へと伸びているような感じた。

『ちよつのつりよく眼下には再びどよめく観衆。といっても、普段からこういった『不思議な力』に見慣れている彼らは、それほど大きくは騒がない。』

10mほど浮上したところで、上昇は止まり、今度は前方へ体が勝手に押されていく。それこそ意志に關さず、だ。抵抗するとなんだか落ちそうな気がしたのでミサカは動かなかった。

観衆の輪の中から、何人か小学生くらいの子が追いかけてきた。が、それを吹っ切るほど移動は速い。風を受けて、髪やら服やらあちこちがはためきはじめた。不思議と、地面に立っているかのようなしっかりした感覚が足の裏、靴底にかかっている。

スカイデイレクシオン  
これも気空操動の能力なのだろうか。

ミサカは飛行機に乗ったことはない。飛行機だけでなく、「空を飛ぶ乗り物」は知識だけで実際に乗ったことはなかった。

空を飛んでる。

そんな、子供の願望じみた感覚がミサカを包んだ。

自分にも、そんなあたりまえの人間らしく感じる部分があるのだと知って今更ながらに驚くミサカ。そういえばとあるツンツン頭の少年は、初めて妹達シスターズの存在を知った時、認めたくないという表情をしていた。横の少年は、ミサカが量産型クローン能力者であると知ったらどんな顔をするのだろうか。

と、ふと横を見ると、少年が何か言っていた。気がつかなかったが空中移動による風の音もすごいいため、意識しないと聞き取れない声だった。

櫓橋はこう言っている。

「速いだろ。野次馬のところは抜けたからもうすぐ降りるよ。空中移動なんてそれこそ莫大な演算というのが必要だね、あまり使ったことは無いし、今回は2人だからすごい疲れるんだ。あと、スカート押さえるよって俺最初に忠告したよね？」

言われたのでミサカが目をやると、自分のただでさえ短いスカートは風に煽られて暴風時の旗みたいにバタバタ言っていた。

「風の音もうるさいのであまり気になる音ではありませんが、とミサカは述べます」

「そこじゃない！　っつか、少しは羞恥心というものを考えるよ…」

「？」と本当に分からず首を傾げるミサカに、櫓橋は呆れ果てて溜息をつく。

「いいや、別に。じゃ降りるよ」

言葉と同時に、かくんという軽い衝撃と共に体が落下する。見る間に目線の高度も下がり、いつもと変わらぬ高さの景色となった。

降りた場所は、大きな道で広い道路、広い歩道という場所でありながら人気ひとけが無かった。先程追いかけてきていた小学生達も、もう諦めたようだ。

「近くまで来たから。あと少しで、俺の知ってる精巧アイテム取扱店に着くよ」

変な名前だ、とミサカは思ったが顔には出さない。

……出していないつもりだが、ひよっとするとこの少年にはさっきのように見抜かれているかもしれないが。

と。

歩き出そうとした二人は、その時ようやく気付く。

前方数m先で、清掃ロボに動物餌を与えていた幼い少女が、こちらを見ていた。

小さい少女なので、風景と同化して気がつかなかった。

その子を見た目年齢は8歳くらい、黄色い花柄のカチューシャをつけたショートヘアで、明るいオレンジのインナーに白いカーディガン、可愛らしい半ズボンといった格好をしている。

片手には何故か「えさ」とだけ書かれた袋を持ち、中身の動物餌を清掃ロボに与えている。

実質的には清掃ロボの労働を増やしているだけなのだが、気付いていないのだろうか。

その幼い少女は、今まさに与えようとしていた動物餌を握っている手を止め、空から降りてきた二人をぼかんと見ている（それを言うなら檜橋も女の子の手荷物とやっていることにぼかんとしていたりするわけだが）。

そして、唐突にその目が輝いた。

げ、と檜橋が思う前に、その子は持っていた動物餌の詰まっている袋を落とし、中身があたりに散らばり清掃ロボがグイングインとフル稼働しはじめるのもお構いなしで、二人の方へ駆け寄ってくる。「ねえ今の何能力なのどんな能力どこで覚えたのあなた誰能力レベルいくつ私にも使えるかなねえねえねえ！」

少女はいきなりまくし立てる。檜橋はこの人懐っこい少女に面食らった上速すぎてどんな質問を受けているのか分からなくて戸惑う。隣ではミサカも同じようにこの興奮少女を見ている。

だいたい檜橋は、この高速懐き少女にはつきり言って、引いた。

「君はそこで何してたの」

檜橋はひとつとして質問を聞き取れなかったので、逆に質問して誤魔化してみる。

実際には誤魔化せなかったが。

「聞いたことにはちゃんと答えて欲しいな。無視とかスルーっていけないんだよ知ってる？ 私はスルーしない偉い子だからちゃんと答えるけどね、パリオンに餌をやってたんだよ」

「パリオンって何？ どっかの都市の名前？」

「その清掃ロボットの名前。私が付けたんだよ」

どうもこの子は清掃ロボという認識はあつて名前まで付けるくせに、餌を与えると喜んで食べるものと勘違いしているらしい。

当のパリオンは、ばらまかれた動物餌を必死にかき集めて消費そつじしている。

「でね、ちょっとちょっと、私の聞いたことにも答えて。今の能力なの？」

「そつだよ」

「なんていうの？」

スカイデイレクシオン  
「気空操動」

「どこで覚えたの？」

「生まれつきだよ」

「じゃああなた誰？」

「榎橋誠斗。言っとくけど中3だぞ」

「じゃあ」

一旦答えてしまうと、こんな調子で永遠と問答が続いてく。うわあ悪徳商法みたいな質問攻撃にはまってしまいましたと榎橋は心の中だけで絶望する。少女は聞きたいことが無限にあるらしい。子供の好奇心はいいが、榎橋はついにさじを投げた。

「だあーもう聞くことありすぎだろ。そんな分ならFAXにでも書いてまとめて送れよ」

「ふあつくす？」

怪訝な声を上げたのは懐き改め質問少女ではなくミサカだった。半分首を傾げるようにして、榎橋の方を見るミサカ。

「狐ですか？ とミサカは確認を取ります」

「それフォックスだろ」

「では不死鳥で」

「それはフェニックスだろ。もしかしてミサカわざとボケてる？」



今は質問というより確認に近かった。FAXを知らない学園都市の人間なんているわけがないだろうと榎橋は思っていた、のだが。ミサカは答えない。榎橋と少女から顔を逸らすとぶつぶつぶつぶつ1人でやりはじめた。

まさか本当にFAX知らないわけではないだろうし、他に似た単語でも考えているのだろうか、と榎橋は考えたので特に声をかけはしなかったが、ちよんちゃん、と袖が引つ張られた。

顔を向ければ例の質問少女。

「この女の人、誰？」

「なんだその浮気相手を追求するみたいな質問は。……えーと、ミサカだってさ。下の名前知らないけど」

「ミサカ。……ふーん」

少女はそれだけ言うと、顔を逸らしてぶつぶつ言っているミサカを（じろじろではなく）観察した。そして片手に持っているゴーグルに目を留め、それから口の中で一言呟いた。

榎橋には聞き取れない、小さなくもった声だった。

なんて言ったんだろうと榎橋は思ったが、口に出す前に再び質問がやってくる。

「仲良いの？」

「さあ？ さつき会ったばかりだから。向こうがどう思ってるか分からないし。てかなんでホントさつきから恋問題みたいな質問してくるわけ？」

櫓橋としては当たり前のことを答えたのだが、そうなんだ、と少女はどこか満足げにっこりすると、こちらからの質問には答えず動物餌の袋を拾い上げる。

さつき穴でも空いたのか中身がさらにこぼれ、清掃ロボがグオーンといきり立つがお構いなし。

「じゃあ他の清掃ロボットにも餌をあげないといけないから、おにいちゃんとおねえちゃん、またね！」

そう言うと、櫓橋が気付いた時には少女は駆け去っていた。例えでも何でもなく、あっと言う間にどこかへ走って行ってしまった。とっても忙しい少女である。

後には、使命を全うしようとする清掃ロボと、ぶつぶつ言い続けているミサカと、さてどうしようか状態の櫓橋が残された。

「行くぞ。もうすぐそこなんだから」

とりあえず櫓橋はつんつんとミサカの肩を突いてみる。

振り向いたミサカは、毎度の事ながら無表情だった。そして何も言わない。

まるで続きを促すかのように黙っている。

「行くよ」

何のつもりなんだろうと訝しみながらも、一応言ってみた。歩き出せばミサカはついてくるが、やはり何も言わない。没頭するような考え事でもしているのかもしれないが、分からない。

俺はなんて言えばこの状況を打破できるの？ と心の中で頭を抱える榎橋。

ミサカは、真剣にFAXの意味を考えていた。どこかで聞いたことがある様な気がするのだが、全く思い出せない。もしかしたら自分の記憶の性能は他の妹達スベックより劣っているのかもしれない。

人知れず、心の中で悩み込むミサカ。

ただの傍観者からすれば、年頃の二人にしか見えないが、二人の頭の中に渦巻くものはもつと深刻だったりする。

その頃、榎橋とミサカが歩いている道路沿いに建て並ぶビルの間、路地裏と呼ばれる場所に、「誰か」がいた。

その「誰か」は、空から二人が降りてきてからの一部始終を見ていた。

今、榎橋とミサカは角を曲がって道路を外れた。その瞬間にタイ

ミングを合わせるように、「誰か」はトランシーバーのような通信機を取り出して口元へ運ぶ。

「<sup>ターゲット</sup>目標、12057号を確認。詳細な内部データは今のところ不明。同伴の少年との関係は浅いため一般人への被害は0で済む予想。<sup>ターゲット</sup>目標を確認したためこれより第二段階計画へと移行」

「さあて着いた」

榎橋はとある店の前で足を止めた。

その店は、店内の敷地から溢れるように歩道にまで棚が並び、看板には英語で文字が書かれているものの近代っぽくなく、店の奥はやたら静かだ。棚の下部には、『修理・改造・交換など承ります』と手書きでお知らせみたいに書かれている。

第一印象は、専門店が品物を大量入荷したみたいな店だ。

「ここでなら、たぶん替えもあるはず」

ミサカに向けて言ったはずだったが、返事は無い。

「着いたよ。聞いてる？」

怪訝に思っって振り向く。

が、そこにミサカはいなかった。

歩道に立っているのは、櫓橋だけ。

「あれ？」

急いで辺りを見回す。しかしミサカの姿はどこにも無い。さっきまで確かに後ろにいたと思っていたのに、忽然とミサカの姿が消えていた。

#4 不幸な日常 Unhappy daily life (前書き)

ところ変わって……原作の主人公です。

これは説明を省かせていただきます。何故って？ ……面倒だからです。

## #4 不幸な日常 Unhappy daily life

学園都市、第七学区のとある高校。

そろそろ放課後間近なこの時間、至ってシンプルを誇るこの学校、もう特徴という特徴のない平凡すぎるこの学校のとあるクラスで、

世界でも類を見ない大乱闘が起こっていた。

事の始まりは少年AとBとCが集まって世間話をしているうちに、何故か『二次元キャラ最強の要素とは何か』の論争に発展してしまい、ロリだの巨乳だの超起動少女カナミンだの訳の分からない用語が飛び交い、結局は拳を振るい合う決闘バトルが始まってしまった。

さらにクラスの平和を保守するべく出動した平和維持部隊の吹寄制理によって、その決闘バトルはさらに悪化し、机という机はひっくり返ったり詰められたりして、クラスの8割が席を立って壁際に避難している。

問題の3人は、現在進行形で薙ぎ倒されている。

「貴様らはいつもいつもクラスの雰囲気マシカルパワーを乱す事ばかりして、もう少し真面目な会話は出来ないの！」

「いやこのクラスの治安を一番乱してるのは吹寄さんだと思グキヤ！」

余計なことを言いかけた少年Aが、椅子と机の山に激突してもの

すごい音を立てる。

と、そんな時に、クラスの空気に合わない小さな先生が入ってきた。

「はい皆さん、もうじきチャイムも鳴るのでー、ちゃっちゃんと帰りの学活を終わらせちゃいまー」

見た目小学生にしか見えない女教師こと月詠小萌は、目の前の悲惨な光景に言葉と動きを止め、たっぷり3秒かけて眺めた後、

「きゃ……きゃああ!? 上条ちゃん!? 上条ちゃんが特撮ヒーローの悪役並みのやられっぷりを披露しているんですけど!」

ちなみに上条ちゃんとは少年Aのことである。

たった今少年Cを締めおとしたクラス平和委員の吹寄は、片手でざっと髪を掻き上げて言う。

「こいつらが乱闘を起こしていたので黙らせました」

「吹寄ちゃん、先生には吹寄ちゃんがこの3人と乱闘していた様に見えるんですけど」

「違います!」

その声を聞き、吹寄の足下で伸びていた金髪サングラスの少年Cは、

「いや……あんまり違うはないにゃー……こちとら一方的に叩きの



めされたぜよッ」

煩い密告者を踵で蹴り上げて黙らせる吹寄。

「こいつらは放つといて帰り学活始めましょう」

「先生はこんな暴動の中心地みたいな教室で帰り学活を始める勇氣などないのです……」

「先生」

椅子の背を杖にして、少年Aが立ち上がるところだった。

「確かに俺達は二次元最強要素で口論になったけど、乱闘を始める前に襲われて、教室をここまで荒らしてしまったのは吹寄さんでゴグシャ」

少年Aは問答無用で、もういっぺん椅子と机の山に叩きつけられた。

上条当麻は、まだまだ高いお日様の光を背に浴び、その背中に手

を当てながら学園都市の街中を歩いていた。

いくら直接打撃に慣れている上条とはいえ、硬い机に何度もぶつけられるとさすがに響く。背骨が痛い。

もう今日は厄介なことはごめんだぜ、とか考えていたのだが、それは不幸な上条さんのこと、そういう嫌な予感だけは見事に的中するのだ。

「……げ」

向かいから歩いてくる、常盤台中学の制服姿の超能力者が見えた。

だから今日はもう決闘バトルなぞしたくない。

(どうする？　ここで背を向けて逆方向に歩き始めれば向こうも怪しいって思うだろうし。かといってこのままだと絶対見つかるし。よしここはお互いに気付かないふりして何気なくすれ違うことにしようそうしよう)

上条は決めると、さも自然な動きで空を見上げ、常盤台のお嬢様は視界から外してのんびり歩いていった。今日の晩ご飯は何にしよつか、冷蔵庫の中になんかあまりでもあったかなあなんて考え

「ちょっと、ナニ思いつきり目逸らしてんのよ」

どん、と人とぶつかる衝撃があった。上条が仕方なく視線を降ろすと、なにやらバチバチと不穏な気配を漂わせつつ睨みつけてくる

お嬢様の姿が。

「御坂」

「何よ」

「今日はだめだ」

素早くその肩を押しつけて、出来る限り早足で立ち去ろうとしたのだが、背中にビリッという感覚が伝わった。

これは今すぐ止まれという警告だ。

上条は溜息と共に仕方なく振り返る。

「だから今日はだめだって」

「私まだ何も言ってないでしょうが」

「言わなくても分かる。そのビリビリした雰囲気だけで分かる」

「……、別に私は雷撃なんて使おうとは思ってなかったわよ、最初はね。でもアンタが不自然に目逸らしたりするからなんかこう

だからアンタのせいよ！」

「何だあ最後の逆ギレ気味な台詞！ 意味わかんねーし！ っつーかお前は俺が何しようと思っただ途端にビリビリしてくんじゃねえか！」

何だとビリビリィ！ とついに電撃の音が炸裂する。

自分が余計なことを言うからこつなるんだということを、未だに学習していない上条当麻である。

## #5 白猫 Interest | object

(ミサカ12057号はネットワークへの参加を拒んでいるみたいですね、と11075号は状況の確認をします)

(12057号は最近協調性が欠けています、と10049号は心配してみます)

(調整をしていない妹達シスターズなど12057号だけです、と12399号も懸念します)

(時に12057号と共にいるあの少年は誰なのでしょう、と16021号は未確認の人物を挙げてみます)

(先程の小さな少女とのやりとりから察するところ、彼はならばしせいと榎橋誠斗と名乗っていましたね、と11118号は少年の名前をひたりと当ててみます)

(ミサカ12057号が誰と接しようとする自由ですが、調整という鎖から1人で逃げて勝手に出会いを作るとするのは許せん、と1723号は不満を述べます)

(要点はそこではなく、と18008号は突っ込みを入れます)

(ミサカ12057号は、他のミサカ達と人格データに多少の違いがあるような気がするのですが、と10032号は発覚した気にかかる点を挙げます)

(そうでしょうか、と10904号は特に違わないと思うと暗に告

げます)

(ううん、やっぱりデータコードが変だと思うよ、ってミサカはミサカは……あ、20001号は妹達をまとめる立場として立派に仕事を果たしてみたり)

(ここはやはり絶対能力(レベル6)進化実験の元研究者であり、システム妹達にも詳しい芳川桔梗よしかわききょうに解決あるいはその糸口の発見を依頼するのが正然でしょう、と19998号は最終信号に告げます)

(分かった、キキヨウに伝えてみるね、ってミサカはミサ……うーんと、20001号は任せておきなさいってのノリで胸を張って新たな任務を引き受けてみたり)

にー。

ミサカを探して、檣橋が来た道を引き返していると、突然脇から猫の鳴き声が聞こえた。

普段なら、猫の鳴き声など聞こえても、ちらりと目をやって「あ、猫だー」で終わるのだが、今回はそうは行かなかった。

何故なら、ミサカがいたから。

よくよく見れば鳴き声を発したのは段ボールに入ったいわゆる捨て猫で、色は白かった。そしてミサカは、その白猫のそばに屈み込む格好で固まっていたのだった。

もっと近くに寄ってみると、段ボールの中には白猫の他に、ぼろっついタオルも入っている。引っ掻いてぼろぼろにしてしまったのだろう。

白猫は純白の白というより、ほんの少しだけ灰色味がかかった白猫だった。警戒するように毛を逆立ててミサカのことを睨めつけている。

「猫が可愛すぎて止まってしまいましたか」

いきなりの背後からの声（榎橋の呆れた声）に、ミサカの体がびくつと少しだけ震える。

「猫が好きなんだ？」

隣に屈み込んで一緒に猫を眺める少年の問いに、ミサカは少しだけ視線を向けた後、頷いた。

白猫は『なんかもう1人増えたんだけど？』という感じで、威嚇を忘れてぼかんとしている。

榎橋はちらりとミサカの横顔を見してみる。その目が、表情が、この猫が欲しくてたまらないということを示していた。

もう、うわーだめだこりゃーと投げたしまうくらいな純粹の愛欲

である。

「この猫、捨て猫だよ。飼いたいなら拾っていけば」

促してみるのだが、ミサカは首を横に振る。

「そうしたいのは山々ですが、それはあくまでミサカの個人的な感情であり、実際に苦痛を受けるのはこの猫の方なのです、とミサカは解説と共に辞退します」

「苦痛？」

「はい、ミサカ的能力は電撃使用エレクトロマスターの一種、欠陥電気レディオノイズです。その能力のAIM拡散力場により、ミサカの体からは、小動物だけが感知するほどの微弱な電磁波が発せられているのです、とミサカは懇切丁寧に説明します。よって、ミサカは眺めるだけで我慢するのです」

なんて動物思いなんだと、榎橋は不覚にも感動した。そして同時に不憫だとも思った。生まれついた能力のせいで、一生好きなものに触れられず生きていくなんて非情すぎる。

ミサカの瞳には、たとえたまたま通り過ぎた道で見つけただけの猫でも、たとえ猫の方から睨まれていても、たとえ触れられなくても、ずっと愛しく見ていたいという複雑な感情が宿っていた。

榎橋はそんな露骨に感情を表すミサカを見るのが初めてだったりする。

「……よし」



櫓橋は声と同時にさつと手を伸ばし、白猫を抱き上げる。隣ではミサカがやや不満そうな目でこちらを見てきてその上何か言いたそうだったがそれは無視して、

白猫をミサカに押しつけた。

「!???」

いきなりの出来事に混乱した様子のミサカ。白猫の方も『はえ?』といった状態でおとなしくしている。

やがて、無理に猫を押しつけられたと徐々に理解したミサカは、怒りを含んだ口調で言った。

「……たつたいま猫に苦痛になると教えたのに、あえて行うとは

」

「……いや」

「猫のためなら我慢をするのだと宣告したミサカにこのような行為はもう嫌がらせと受け取っていいで」

みるみる激怒度のボルテージが上がっていくミサカを余所に、櫓橋は平気な顔で言う。

「別に嫌がってないじゃん」

は? と言葉を止めるミサカ。

腕の中の白猫を見てみると、確かに爪や毛を立てるでもなく、し

つぽを丸めて怖がるでもなく、白猫は嫌がるそぶりを見せずに普通  
にしている。

この様子に、ミサカの方があれ？ と思った。  
嬉しいといえば嬉しいが、腑に落ちないしふしぎふしぎである。

「まあ、世の中には電磁波なんて気にしない猫もいるって事だよ」  
そう言われてもぱっとこないミサカだが、考えても分からないこ  
とは保留として頭の隅にしまった。

結局、ミサカの軍用ゴーグルは修理されないまま、二人は道を歩  
いていた。

ミサカはこれから白猫を連れて家に帰るらしい。なんかもうゴー  
グルはどうでもいいようだ。櫛橋も一緒に歩いているのは、せめて  
ご両親にゴーグルの件でお詫び申し上げたいと思っているからだ。  
人並みに責任感はある櫛橋なので、このまま別れるのは良心が痛む。

ミサカは特に理由も聞かないし（興味が無いのかもしれないが）、  
明確な拒絶反応も無いので櫛橋はほっとしている。

……さっきまではほっとした気分でいられたのだが。

「まず、生き物を飼うには愛情を込めて名前をつけてあげましょ  
う、  
だつてさ」

「どこを見て『だってさ』とか言っているのですか、とミサカは疑問を投げかけます」

「いいんだよどこでも。でさ、ほら名前つけてやれよ」

……、と、ミサカはしばらく腕の中の白猫に目を落としていたが、やがて顔を上げた。

「しろね」

「そのまんま!?!」

思わず叫び声が出た榎橋だが、ミサカは止まらない。

「ではくるねこ、とミサカは再考します」

「いや黒くないししかもそつちじゃないし!」

「ではみけねこ、とミサカは再考します」

「……いや、だから三毛じゃないしどうしても」  
ねこ『じゃな  
いとだめなのか? もっとかつこいい名前とかあるだろ」

「ではグラントキャニオン、とミサカは再考します」

「大規模自然物の名前つけてどうする」

「ではモン・サン・ミッシェル、とミサカは再考します」

「歴史的建造物の名前つけてどうする。いやだからね、長すぎる名前は」

「では寿限無寿限無五劫の（ry）、とミサカは再考します」

「聞けよ！ いくら何でも長すぎるだろっていつかその長さで笑いを取った落語の用語を何そのまま引用してるんだおまえ！」

「では、ああああ、とミサカは再考し」

「ざっけんな！ 某RPGでお決まりの禁止ネームつけてんじゃねえよもう少し真面目に考えろ！」

「では真面目に考えて、もち、とミサカは再考します」

「……もうそれでいんじゃない？ なんかそんなくだらない名前でも真面目に聞こえてくるよ」

「いえ、これではミサカが納得がいきません、とミサカは案を破棄します」

「おまえ殴られたいのか！」

歩きながら猫の名前で大論争を繰り広げる二人は、またしても注目を集める。当の名無し猫は、はたはた迷惑そうに耳を垂れてミサカの腕の隙間の奥へ潜り込んでいる。

「ではパリオンが最適でしょう、とミサカはどこかで聞いたことのある名前を宣言します」

「どこかでじゃないそれさっきの女の子が清掃ロボにつけてた名前だろ！ ちゃっかり著作権侵害してるんじゃないやねえよ！」

「ではシロ、とミサカは再考します」

「……もうそれでいいんじゃない？ 一番まともだと思う」

「いえ、これではミサカが納得がいきません、とミサカは再び案を破棄します」

「……………（怒）」

「パルメザン、とミサカは再考……しかけて破棄します」

「……………（震）」

「やはりしろねこ、とミサカはどこかで聞いたことがある名前を

「

「……………（握）」

いい加減にしろテメエ！！ と江戸っ子もビツクリの啖呵が炸裂。道行く人々は振り返る前に思わず耳を押さえるほどの大音量だ。これがミサカの場合耳のすぐ近くだから相当なダメージを与えたはず。躊躇ったと言えば躊躇ったが、これで効果があるなら。これで少しはハンパ無い思考回路を戻せるならと思ったのだが。

「みつ、ミサカは衝撃を、受け流す技術スキルを演算により導き出している。なので身体的なダメージには耐性がある、のですがこんなにも直接頭に響く攻撃を受けたのは初めてです、とミサカは効率良い衝撃の

吸収と回復を模索したいのですが頭が働きません」

こんな感じだ。

なんとというかもう、反論する気が起きない。一応音による攻撃も身体的なものな気がするし。

榎橋は諦めるといっつか脱力して問いかける。

「……じゃあ最後に聞きます。あなたが自分の持てる限りの精一杯の愛情を込めて考えて、ついに思いついたこの猫の名前は何ですか？」

「しろね」

即答だった。

「……」

その時、ミサカはおふざけでもなんでもなく、ただ真面目な表情でしろねこ、と言った。

だから精一杯考えついたそのとおきの名前を、榎橋は受け入れることにした。

「もういいよそれでしろねこで！ おまえは今日から正式名称しろねこ、ニツクネームしろちゃんだからな！」

シャーッ、と。

白猫はその名前を受け入れてはくれなかったが。

## #6 量産能力者 The revealed truth

「でね、ミサカはキキヨウと一方通行アクセラレータにお話があるんだよ、ってミサカはミサカはいつになく真剣な表情で切り出してみたり」

こちらはとある病院の一室。

普段はベッドで寝ているはずの芳川桔梗は上半身だけ起き上がり、一方通行は壁に寄りかかって立っていた。

そして二人が注目しているのは、見舞客用の椅子に腰掛ける見た目10歳程度の少女。

量産型能力者『シスターズ妹達』の統括中枢の役割を持つ、通称打ち止めだ。

「シスターズ妹達に関する事なの？」

芳川の口調が、研究者口調へと変わっていく。

「うん、さっきミサカネットワークに繋がったんだけどね、ってミサカはミサカは」

「用件を早く言え」

不機嫌そうな口調で遮るのは一方通行アクセラレータ。彼は今から缶コーヒーを買いに出ようとしていたところなのだ。

「うわーいぶつちぎりありがとう、ってミサカはミサカはやけくそで感謝してみる。用件はね、ミサカに仕込まれたのと同じウイルスが」

「まさかオマエまたウイルスに感染したとかいう話じゃねエだろうなア？」

再び遮る一方通行。アクセラレータ 打ち止めは頭を振る。かぶり 芳川はそんな様子を見て何が可笑しいのか少しだけ微笑むと、ラストオーダー 打ち止めに先を促した。

「続きをどうぞ」

「でね、用件はね、8月31日の事件の時と同じウイルスが下位個体のミサカに保存されてるんじゃないかってミサカはミサカは推理してみたの」

「何を根拠にんな事言ってるんだ？」

アクセラレータ 一方通行だけでなく、芳川も怪訝な顔をする。

対して、ラストオーダー 打ち止めはまるで答えを用意していたかのように続けた。

「シリアルナンバー 検体番号12057号は、未だに体の調整を受けようとしていないって知ってる？」

「嘘でしょう？」

反応したのは芳川だけで、アクセラレータ 一方通行は渋い顔をして黙る。

「嘘じゃなくて、12057号はまだ調整を受けてないんだよってミサカはミサカは教えてみたり。それにミサカネットワークに呼び出してもすぐ切断するし、これはなんか怪しいかもってミサカだけじゃなくて他のミサカも思ってるんだから、ってミサカはミサカは



みんなの思考を代弁してみる」

「つまり何だア？ オマエはその12057号が無愛想だからウイルスに感染したんじゃないかねエかとか思ってる訳か？」

この問いにも、ラストオーダー打ち止めはすらすらと答える。

「ううん、理由はそこじゃなくて、ミサカが自分のデータコードと12057号のデータコードを照らし合わせてみると、下位個体と上位個体の違いの他にも絶対おかしい点があるんだよ、ってミサカはミサカは証拠を掲げてみる。12057号以外のミサカと比べても相違点があるし、そもそもミサカ達はミサカネットワークという大きな脳で統一されているはずだから、1人だけ調整をしないっていう選択はおかしいんだよ。つまり」

「12057号は無意識のうちに、誰かに予備となるウイルスを仕込まれていたかもしれない、という事ね。ウイルスコードのせいで、12057号にはデータコードに違いがある、と」

途中で芳川が引き取り、ラストオーダー打ち止めは頷く。

だが一方通行にはいまいちよく分からない。アクセラレータ

「そのウイルスつてなア予備を作ったところで効果があんのかア？ わざわざシスターズ妹達の誰かになんざ仕込まなくたって自分で大事に抱えてりゃいいだろオがよ」

「その場合、仮に研究室に保存しているとたとえば私みたいな人間に見つかる可能性もあるでしょう。それからもう一つ、ミサカ単体を通して最終信号を除く全てのミサカにウイルスコードを回せるとラストオーダー

考えたのかもしれないわね。まあ打ち止めが健在な今は、その効果が薄いんだけど。……たぶん、学園都市外部の組織から、あの天井<sup>いあひ</sup>に命令が下ってやられた可能性が高いわ。あの時はあくまで保険のつもりだったのでしょうけど」

説明を受けても、やはり一方通行にはよく分からない。  
アクセラレータ

「で。12057号がウイルスコードを持つてるとなにか問題があるのか？」

「考えてみて、ってミサカはミサカは要求してみたり。12057号がウイルスコードを持つているということは、学園都市外部の組織がそのコードを狙ってくるかもしれないんだよ、ってミサカはミサカは今一番の危険点を挙げてみる。それに、12057号が調整を受けないのは、12057号の意志ではなくて、機関で予備のウイルスコードを持つていることがばれないためにウイルスコードの一部に隠された指示なのかもしれない、ってミサカはミサカはそうしたら12057号は調整が受けられなくてすぐに細胞が劣化して死んじゃうってことを暗に語ってみたり」

「つまりアレだ、オマエはこの俺に12057号のウイルスをオマエと同じように取り除いて欲しいって訳かア？」

「だいたいのところそうなる、ってミサカはミサカは肯定してみたり。学習装置<sup>テストメント</sup>でもあればいいんだけど、12057号の前の人格データが無いと意味も無いしね、ってミサカはミサカはまるでウイルスコード撲滅の専門家みたいな顔をして語ってみる」

「お断りだな」

断固とした口調に、打ち止めは最初驚いたような顔をしたが、すぐに詰め寄ってきた。

「どうして？ どうしてどうして一方通行は12057号を助けようとしてくれないの？ ってミサカはミサカは返答次第によつてはぶん殴るぞっていう意気で気張ってみる」

ぐいぐい詰め寄ってくる打ち止めから顔を逸らすと、一方通行は呆れたように息を吐いた。

「いいか、俺が助けるといふやり方だとそいつの記憶は全部消えんだ。今までのが全部な。12057号にも思い出つてのぐれエあんだろ」

「でも」

「ああ分かっている。オマエらは記憶を共有してるから記憶自体はすぐに戻るんだろ。俺は記憶を無くしたことがねエからどんな感覚かなんてわっかんねエけどよオ、だとしたって顔も知らねエ他人の日記なんざ読んだところで面白くも何ともねエだろオが。その記憶はオマエらの記憶であつて12057号の記憶じゃねエンだよ。確かにオマエの時は記憶を消す覚悟でいたけどな、それはオマエの命に関わることだったからだ。さつさと調整を受けさせればウイルスコードを持っていようが記憶は消されずに済むんだろ。だったら無理にでも医療機関に預けちまエばそれでいい」

一方通行は、自分の口からこんな善人すぎて生ぬるい台詞が出てきたことに自分でも驚いていた。

自分が殺してきた一万人以上のクローン。それも実験当初は虫け

ら同然としか思っていないかった人造物。しかし今はその内の一体の記憶さえも守ろうとしている。

これが生ぬるいんだ、と一方通行は思うが、目の前のクソガキに悟らせないためにも顔には出さない。

そう、平たく言えば自分にそんな権利はないはずだ。一方的に命を奪っておいて、後から身の心配なんて駄考は、たとえ双方が望んだことだとしても、単なる埋め合わせにもならない偽善だ。一言で切り捨てられるようになかったるい問題に過ぎない。

だが彼は、そのことを嫌だと思っていないことまでは気付いていない。

「でも、でも、無理矢理も12057号に可哀想だと思っな、ってミサカはミサカは弱々しいのを自覚して反論してみるんだけど……」

ぶつぶつと小さな反論をする打ち止めのことはもう放っておいて、さっさと缶コーヒーを買いに出ようとした一方通行だが、ふと、芳川の笑みが癪に障った。

「アンだよ？」

「君の言葉にはいくつか抜け穴があるわね。論点がずれてるわよ」

微笑んだままの芳川の言葉に、打ち止めも顔を上げる。

「まず12057号にウイルスが仕込まれている。これは覚えやすいキリ番ではないところに、隠そうとした意志が感じられるわね。普通、何かの調査とかに身体測定が必要な時は、10000とか5

000とかそういう単位で区切れるような番号のを使うのよ。それにわざわざウイルスコードに追加のおまけをつけて、自らばれることの無いように12057号の行動を僅かながら操っている。ここまできるとなかなか執着していそうよね、このウイルスに」

アクセラレータ

一方通行は眉をひそめる。

何が言いてエンだこの女？

「ということとは、たとえ医療機関に預けたところで、そこに敵の手が伸びる可能性も高いわ。ウイルスコードのことがばれたなら余計に奪還しようとするでしょうし。そしてもし組織がウイルスコードを手に入れたら、またあの日の事件のように、最終信号にウイルスを仕込んで量産型能力者の世界規模反乱を起こさせようとするかもしれないのよ」

アクセラレータ

……チツ、と一方通行は口の中だけで舌打ちした。

正直なところ12057号が敵の手に落ちてどうなるのが知ったことでは無いが、一般人に手を出そうとするような得体の知れない組織の考えは気に入くない。

そして何より、この打ち止めラストオーダーに危害が加わるのはなんと少しでも避けるべきだ。

避けたいや避けなくてはならないではなく、絶対に避ける。

そうなるのと彼の取るべき道は一つしか残されていなかった。

いったいいつから自分はこんなにもお人好しの人間に成り下がってしまったのだろうか。成り下がった、なんて言うラストオーダーと打ち止めに騒がれそうだが、一方通行の価値観からしてみればその表現が適切で

ある。

そこには、やはりあの無能力者の少年が関わっていることだろう。

アクセラレータ

一方通行は余計に不機嫌になった様子で頭を掻く。

「あーアめんどくせエ。いったいどこの誰だよこんな目障りな細工くだらねエままじやってんのはよオ。どうもグツチャグチャに潰されてえみてエだなア！」

アクセラレータ

「……一方通行つてはちょっと恐いんだけど、ってミサカはミサカはぶるぶる震えてみたり」

アクセラレータ

一方通行は杖を使ってもたれていた壁から身を起こし、気急げに病室のドアへ向かう。そして、振り向かず一言だけ言った。

「行くぞクソガキ」

「……同じだよ」

ミサカと共に歩いてきて、足を止めた場所は、ずいぶん寂れた

研究所だった。看板というかネームプレートと言つべきか、それらはすべて暗く、建物自体に生気が無い。入口にあたる扉は取っ手が錆びかけていて無理に引つ張つたら取れそうだし、扉も蹴つたらそのまま蝶番から外れて吹っ飛びそうなくらいだ。慎重に開けたとしても、キーキー鳴りそう。

全体的に見て、枯れ寂れた森の入口に立っているような気がした。

「ほんとにこんなところに住んでるの？」

「ここがミサカの住所ですから、とミサカは即答します」

「んー………チャイルドエラーつてか、どうして学生寮に住んでないの。あれか、もしかして置き去りで寮を追っ払われたとか？」

チャイルドエラー置き去りとは、親が子供を学生寮に入れるために入学金だけを支払つてその後行方をくまらず行為の事を指す。また、その子供のことも総称して言う。

チャイルドエラー要するに捨て子である。常盤台中学などという名門校なら、置き去りなんてものはさっさと退学させるに違いない。

「チャイルドエラーミサカは置き去りではありません、とミサカは否定し、そもそもミサカには親や兄弟姉妹といった家族はいませんから、とミサカは補足説明します」

確かに、ミサカには御坂美琴という姉がいる。姉だけ授業料を払つて、妹の方は置き去りにするなんてそんな親はまずいないだろう。いる可能性はあるが、そんなことをしてもすぐに送り先から身元が判明し、チャイルドエラー置き去りを送り返されるのがオチ。つて、ちよつと待て。

榎橋は頭に入ってきた言葉に、耳と脳の両方を疑った。

ミサカに家族はいないだと？

「ちよつとちよつとストップ」

「ミサカは何も言っていないませんが、とミサカは怪訝な顔をします」

「いやそうじゃなくて、おまえさつきなんて言った？」

「ミサカは何も言っていないがと言いましたが」

「だからそこじゃなくて、その前！」

「ですからミサカは置き去りではなく、そもそも親や兄弟姉妹はいない」  
「チャイルドエラー」

聞き間違いではなかった。

確かにミサカは自分の口から家族はいないと告げた。

「だつておまえ、御坂美琴の妹だろ？ 姉がいるじゃん」

「確かにお姉様はミサカ達のお姉様オリジナルですが、とミサカは一部を肯認します」

ミサカ……達？

「えっ、え！？ おまえらひよつとして大家族？」



「ですからミサカには家族はいません、とミサカはきっぱりと断言します」

きっぱりと自分で言うだけあり、ミサカの口調は真実味があった。

(過去に、家族を殺されたりとか大きな事件があったのかもしれない)

榎橋は推測はしても確認はしなかった。本人が気にならないとしてもそういう質問は避けた方がいいはずだ。

しかしでも噛み合わない。超能力者(レベル5)の御坂美琴は姉ではないのか？

聞いてみようと思ったのだが、ミサカはさっさと扉を開け(キー音はしなかった)壊滅研究所の中へ入ってしまった。

榎橋も続いて足を踏み入れてみる。

「お邪魔します……」

答える声は無い。学園都市では、親とも離れて生活するのが基本で、なおかつ一人暮らしの学生も多いためそれほどおかしなことではないが、この研究所で答える声があったりするとそれはそれで不気味だ。

進んでみる。中は暗かった。外の様子を抜きにしても、ここが活動停止状態の研究所なのは一目で分かる。それに、暗いといっても真っ暗闇ではなく、深海をイメージするような微かな光のある闇だ。

「ミサカー」

遠慮がちに呼びかけてみたが、答える声は聞こえない。檜橋はもう少し踏み入ってみた。事務所のような情報処理室を抜け、会議室、休憩室などの横を通り過ぎ、何に使われるのか分からないような部屋の横まで通り過ぎて、再び呼んでみる。が、やはり答える声は無かった。

唐突に、檜橋はこの場所がどんなに暗いかを改めて知った。さっきまでは、入り口からの光が視界を明るくしてくれていたのだ。檜橋の立つ廊下の奥は真っ暗で、何があるのか見えない。吸い込まれるような黒い色が、奥までずっと広がっているだけだ。

しかし、檜橋はその闇の奥に緑色っぽい明かりを見つけた。目を擦ってもう一度見てみても、ぼんやりと見えるのが分かる。見間違いではない。

足の進みを少しだけ速める。知らない間に、お化け屋敷に入ったようなときどきとした感じを覚えながら、檜橋は緑色に見える光を指した。

やがて辿り着いたのは、金属製の重そうな扉だった。廊下はここで突き当たりになっている。

金属製の扉は少し開いていて、そこから緑色の光が漏れていた。さつき見えたのはこれだろう。檜橋は意を決すると、重い扉を引いて中へ入る。

「……うわー」

思わず声が出た。

部屋自体にはそれほど広さはない。少し幅のある廊下のような天井も、そんなには高くない。ただ、壁に対になって置かれているような円筒状の謎の装置が、特に目を引いた。

円筒状の装置はかなりたくさんある。バイオ映画でしか見たことがないような近未来カプセルのなかに、泡の通る液体が入っていて、円筒容器の上と下それぞれから幾本ものチューブが飛び出し、壁や床を這っている。液体は緑色のだろうか。どこに発光源があるのか分からないが、その機械は緑色の光を放っている。

そして、その装置群の中の一つに、ミサカが手を当てて立っていた。

「やっと見つけたよ」

その声に、ミサカは装置に触れていた手を離してこちらを見た。

「やっと、とはどういう事ですか、とミサカは問いかけます」

「いや、呼んでも返事が返ってこないから、ちょっと不安になったわけ」

「要するに心細くなったのですか、とミサカは結論を急がせます」

「まあそんなと」

檣橋はちょっと笑ってそう言うと、部屋の中を見回す。

「すごいなここ。いかにも学園都市らしいよ。得体の知れないクローン兵器でも作ってそうだ」

その何てことない感想に、ミサカの眉がぴくりと動いた。ん？  
と思つて檜橋がそちらに顔を向けると、ミサカは今まで見たことがない複雑な表情（のように檜橋には見える）をしていた。

「どうかしたの」

「一つ質問をしますが、あなたはミサカが何に見えますか、とミサカは無表情のままに訊ねてみます」

いつも無表情じゃねえかよと心の中で突っ込みを入れつつ、檜橋は、この部屋を中心にミサカを見つけたときのそのままの感想を述べてみた。

「デンプア系不思議少女」

その答えを受けたミサカは、一度ちらりと機械に目を向け、再び檜橋を見た。

「実はさっきのあなたの言葉には、正解が含まれていました、とミサカは正直に告げます」

（『実験』は凍結中、再開の見込みはほぼ無いとして、過去の研究内容を口外したところで誰にも実害は無いでしょう、とミサカは結論づけます）

（それにミサカにはこの事実を隠す必要はなく、むしろ量産型能力者であることを受け入れられたければ自分から露するほかはありません）

せん、とミサカは自分を奮い立たせます)

「正解？ 俺さっき何て言ったっけ？」

檜橋は怪訝な顔でミサカを見つめた。ミサカは呼吸と同時に静かに告げる。

「『得体の知れないクローン兵器でも作ってそうだ』、と」

檜橋はやはり怪訝な顔のまま、動きを止めた。「得体の知れない……」と口の中で呟きながら、周りに立ち並ぶ機械群を見回す。中に液体の詰まった、実に得体の知れない機械たち。そして、「クローン兵器……」そう呟きながら、檜橋はミサカに視線を戻した。その表情が一瞬で凍り付く。

「まさか」

「どつやら予想よりも理解が早いようですね、とミサカは」

「だってまさか！ 人間のクローンは禁止されてんじゃないか！ 日本の法律よりももっと大きな決まりだろ！」

ミサカは何も答えない。否定する材料を探しながら、それでも檜橋はそのことが正しいのを直感で悟った。両親も兄弟もいなければ、学生寮にも住まずに家はこんな研究所。普通の人間が、誰もいないこんな寂れた研究所に住むわけがない。

それにこの機械は、培養器の一種だろう。この液体の中に人型のシルエットが浮き沈みしている様子が目に浮かぶ。

そしてさらに、コンビニの前で初めてミサカと会った時、ミサカは超電磁砲レベルガンのことをお姉様と呼んだ。それなのにミサカには姉も妹もない。それが意味することは。

「第3位の超能力者、御坂美琴のクローン……。　　嘘だろ……」

知らず、足が後ろに下がっていた。踵が何かにぶつかり、ガシャンと音を立てる。

それは小さなカゴだった。中には新品の毛布と共に、さっきの白猫が丸くなっている。寝ていたしろねこは、突然の音と振動に飛び起きて激しい威嚇の声を上げた。

「ミサカはこの研究所で作られました、とミサカは告げます。当初は超能力者を量産できるかという実験、次には超能力者をさらなるレベルへと引き上げるための実験。ミサカは、実験のために人の手で生み出された能力者です、とミサカは淡々と真実を告げます」

榎橋はぼうつとしながらもその言葉に聞き入っていた。信じたくはない話だ。だが、心の中の別の自分は言っている。今までもミサカはクローンだったのだから、今自分がそれを知ったところで、何も変わることはないだろう。クローンだからといって、人格が変わるわけでもない。

榎橋は、引き気味だった足を前に進めた。榎橋の踵が離れたことで、しろねこの威嚇の声も止むや。

「量産型、能力者……」

榎橋は呟き、正面からミサカと向き合った。

信じたくはない。

信じなくてもいいと思うし、そもそも榎橋が信じる信じないと決める必要もない。

これは、既に決まっていることだ。

ミサカの瞳は、榎橋が今まで見た中で、一番冷たくて、無機質で、でも一番人間味に溢れていた。

## 余談 1

『暗闇の五月計画』。

一方通行の演算パターンを参考に<sup>アクセラレータ</sup>して、能力者の自分だけの現実<sup>パーソナルリアリティ</sup>を最適化しようと目論まれた、学園都市の闇に沈んだ実験の名だ。

主に引き取り手のいない置き去り<sup>チャイルドエアー</sup>を利用して行われた、その名前を語るのも恐ろしい実験。

あまりの悲惨さに、担当した研究者の半分以上が自殺したり街から逃げ出したりと、終決した今でも心に相当な闇を押しつけてくる実験。

そんな実験の被験者である置き去り<sup>チャイルドエアー</sup>には、僅かながら生き残りがいた。

もつとも、彼らは永遠にその闇からは出られない。どこへ行っても「実験」が後を追い、彼らに残された道は、闇の中で働き生きていくことだけだ。

いったいいつ、そんな凄惨な運命へとレールが切り替わってしまったのだろうか。

学園都市に来る前は、そんな運命が待ち受けているとは知らず、普通の人と同じように、光の中で、希望を持って、生きていけると信じていたのに。

ある少年は、元はサッカーが得意な元気な少年だった。



今の彼は、ある病院に入院し、立ち上がることもすら出来ないでいる。

ある少女は、映画を見に行くのが何よりも楽しみな、笑顔を絶やさないう少女だった。

今の彼女は、暗部の一組織で、主要人員として戦いの中に身を置いている。

いったい誰が、こんな世界を作ったのだろうか。

表に出て、普通の学校生活をすることを夢見る少女がいた。

だがそれは、暗部で生きてきた故に、絶対に叶わない夢だと分かっていた。

それは夢であり、目標とは違う。

何度も自分に言い聞かせ、分かっているつもりだけでも、心の奥では望んでしまう。

暗部くらぶに来た私は、光の世界で過ごしたいと望むことも、許されないのだろうか。

## #7 黒装甲服 Rough mimicry

「それで、12057号ってヤツはどこにいやがるんだ」

「第10学区のとある研究所で少年と向かい合ってシリアスイベント進行中、ってミサカはミサカは頭の中を渦巻く映像を実況風にお伝えしてみたり」

「余計な表現が多いんで分かり辛エンだがよ、要するに第10学区だな？」

タクシーを利用して町中を走行中の一方通行アクセラレータと打ち止めは、ようやく運転手に行き先を告げた。ここまで余計にあちこち走ってたせいでタクシー代が跳ね上がっているのだが、一方通行アクセラレータは気にしない。

「第10学区なんて使われてねエ研究所も溢れかえってるつつうのによくもまあ12057号はノコノコ歩いて行けたモンだ」

「使われてない研究所があるって何なの、ってミサカはミサカは質問してみたり」

「外の勢力が身を隠すのに最適じゃねエかよ。学園都市の外壁にも近ちけエンだしな」

「じゃあ急がないとってミサカはミサカは危機感を露わにしてみたり！ 急いで急いで出発しんこーってミサカはミサカは運転手さんを急かしてみる！」

「赤信号なのでしばらくお待ちいただけますか」

その第10学区の研究所の一室では、榎橋とミサカが向かい合ったまま沈黙していた。培養器内部の液体の泡が弾ける音だけが微かに聞こえる。

「何て言ったらいいか、分からないよ」

榎橋は半分独り言のように話しかける。

「知りたくない事柄でしたか、とミサカは確認を取ります。返答次第によつては謝罪しますが、とミサカは相応の姿勢を取ります」

「いいや、こっちがどうこう言う問題じゃないと思うけど……、君はそのこと教えて、どうしようと思ってるの。機密保護のために殺す気？」

逆に問いかけられて、ミサカは言葉に詰まった。自分でもどうして秘密を明かしたのか分からない。今も、自分の心理状態に疑問を抱いている状態だ。

「ミサカは……」

何とか釈明しようとしてとりあえず言葉を発した、その時だった。

ギユガツシヤアアン！！ というただならぬ轟音と共に、部屋の奥にあつた扉が吹き飛ばされた。

「!?!」

その扉も金属製で重たいものはずだ。扉は一度も床に触れることなく吹っ飛んでくると、培養器の一つと激突した。ガラスが割れるような音がして、中身の液体がどぼどぼと溢れ始める。

吹き飛ばされた扉跡から進入してきたのは、黒っぽい装甲服に身を包んだ謎の人達だった。数人の侵入者は、ミサカを見つけると一斉に銃を構える。

「ミサカ！」

何が何だか分からないが、榎橋は思わず叫んで駆け寄ろうとした。

しかし。

そのとき既に、銃が火を吹いていた。

銃弾が命中した体は仰け反るようにして吹っ飛び、そのまま壁に激突する。さらに数弾の弾丸が後を追う。榎橋は言葉を失った。

いつの間にか。

ミサカの手には黒光りする長身の銃が握られていて、それが火を

吹いたのだ。

残る黒い装甲服も、まさしく一瞬のうちに吹っ飛ばされた。榎橋は驚きのあまり声が出ない。

「白猫を拾ってください、とミサカは切羽詰まって依頼します！」

「……え、しろねこ？ ……けど、」

「早く！！」

その剣幕に押され、榎橋は急いでしろねを抱え上げた。途端、ミサカはついてくるようにとだけ言うと、吹き飛ばされた扉跡の方へ走っていく。

「何だよ今の！ つか今日は何でこんなにイベントばっか起こるんだよ！ ていうか今日はツイてないな！」

一人で叫びながら、榎橋はただの壁に開いた四角い穴となった扉跡から飛び出した。ところがそこで、危うくミサカの背中にぶつかりそうになった。ミサカと装甲服が交戦中だ。

「どうやら外部か内部か分かりませんが、組織の襲撃にあったようです、とミサカは状況の説明をします。この研究所は長いこと撤廃されていたので、狙いとしてはミサカかあなたかどちらかでしょう、とミサカは判断します」

「いやいや解析はありがたいんだけど、なんでこの状況でそんな冷静でいられるんだよ！」

ミサカは一瞬櫓橋の方を見ると、すぐに戻した。

「クローンですから、とミサカは即答します」

何か言っただろうと櫓橋が思った瞬間、再び、バツギイン！という金属音が響いた。

「表からも……ッ！」

舌打ちしながらサブマシンガンを構え直すミサカ。櫓橋は、裏口とミサカとたつたいま破壊された扉の方を順に眺めると、頭を抱えてからミサカの腕を掴んだ。

「くっそいちいち止まって銃なんか構えてたら囲まれるぞ！ こっち来い！」

「は!?!」

何を血迷ったか、櫓橋は銃撃戦の真っ最中である裏口の方へ飛び出した。いきなり物陰から飛び出した二人に一瞬戸惑った装甲服達だが、すぐに銃を構える。

だが、撃ち出された弾丸は二人の体を掠め<sup>かす</sup>しなかった。弾丸は空中で、まるで見えない手に掴まれたかのように突然勢いを止めると、そのまま床に撃ち込まれる。

次には、装甲服達の体が宙を舞っていた。そこに先程の空中散歩のような丁寧さは無い。極めて乱暴に放り投げられた装甲服達の体は、天井に激突した後、頭から床に叩きつけられた。

「そんな乱暴にして命に支障をきたさないのでしょうか、とミサカは不安要素を述べてみます」

「あいつらに遠慮無く発砲してたやつが何言ってるんだか！ たぶんあの服には衝撃吸収とか施されてるから大丈夫だろ、きつと！ そうであって欲しい！」

話している間にも、何人かの装甲服を吹っ飛ばしながら檣橋はミサカを連れて走る。やがて研究所の外に飛び出した。そろそろ地平線の方に落ち始めた太陽の光が目刺すように眩しいが、そんなこととは言っていられない。檣橋は目についた装甲服を宙へ飛ばしながら、出来る限り広い道路を目指して、走って走って走って走って走って、もう脇腹が耐えられないところまで走りきって、ようやく足を止めた。

「はあ……、ああ、ラッキー、日陰がある」

「ぜー、ぜー、と荒い息を吐き、膝に手を突っ張って支えにして、追っ手がいないか確認する余裕が出来て、檣橋はその時ようやく脇にしるねこを持っていたことに気付いた。

「あ、ごめん、窒息寸前」

ようやく締め付けてくる腕から解放されたしるねこは、腹いせに檣橋の両方の靴に爪を立ててきた。

「しかし、いったい今のは何だったのでしょうか、とミサカは疑問を投げかけます」

ミサカの方は、呼吸こそ少し乱れているものの、檣橋のように目

に見えて疲れてはいなさそうだった。檣橋はこの化け物じみたスタミナに呆れかえる。人体改造でも受けたのだろうか。

「誰に疑問を投げてるか……は聞くまでもないか。先に言っとくけど俺は分かんないよ」

「大能力（レベル4）のくせして役立たずですね、とミサカは辟易しながら溜息をつきます」

「同じように何も分からないおまえには何も言われたくないんだが」ムツとして言い返した檣橋に、ミサカも少しムツとしたように返す。

「ミサカは何も分かっているわけではないわけではありません、とミサカは反論します。やはりあの研究所に攻めてきたということは、ミサカ狙いかと、とミサカは結論付けます。あの黒いの達が最初に銃を向けたのもミサカであることから、ミサカが狙いで間違いは無いでしょう、とミサカは二重に確信して結論を告げます」

「ミサカミサカって聞き取りづらいんだけど」

「人の喋り方にケチ付けるなクソ野郎、とミサカは」

「あーごめんねじゃあ撤回するよ。で、狙われるような心当たりはあるの？」

「いえ、まったく、とミサカは即否定します」



照明の弱い、薄暗い部屋の中に、二人の人間がソファに身を沈めていた。

片方は大人、片方は子供。

「了解」

小さな影が言葉を放つ。向かいの人間へではない。その影は、トランシーバーに向けて話をしていた。

コトリ、という小さな音がして、トランシーバーが黒く光る木製テーブルに置かれた。

「突入部隊から連絡。目標である12057号は、先程から行動を共にしていた少年と研究所から逃走、追跡部隊も動き始めています。が全く後が掴めないとのこと。突入部隊のうち8人が負傷、いずれも捻挫程度の軽傷で特に問題は無いとのことですが」

子供の影は、既に大人の影に向けて話しかけていたが、大人の影は答えず身動き一つしない。

「一般人への被害の予想……これはゼロでは済まないかもしれませ

ん

「一応、捕獲相手が電撃使いということも考えて、対電気装備を指示したはずだが？」

大きな影が、不意にソファから立ち上がり、すぐ横に置いてあったダンベルを掴んで上げ下げし始めた。

一方、子供の影は呆れた声で、

「筋トレしながら状況報告を受けるボスというのはイメージぶっ壊しだと思えますが」

「でかい葉巻を加えたサングラスの黒スーツだけが頭だというわけでは無かるう。現に作戦の組み立てや部隊への指示といった実質的な統率は貴様を取り仕切っているのだ。それよりも、対電気装備のことだが」

「確かに全部隊にその装備をさせました。しかし、あの少年は高度な空気操作系の能力者で、12057号もサブマシンガンを使い能力は使わなかったと」

「……、鬱陶しい邪魔が入ったな」

大人の影はそう呟くと、10kg重い別のダンベルを手に取る。

「どうしますか。このまま部隊に任せるだけでは、少年も危険に晒すことになりますか」

ダンベルを上げ下げする音が消えた。ゴン、という鈍い音がして、

床が少し振動する。大人の影が勢いよくダンベルを置いた音だった。

「俺は一般人の被害などどうでもいいと言ったはずだ。役立つ部下下どもが幼稚園児を殺そうと統括理事長を殺そうと知ったことではない。だが、貴様が一般人の被害はゼロにしたいのだのと喚いているのだから。確実に捕獲を成功させるのならやり方は問わないが、余裕が無くなってきていることを忘れるなよ」

「……はい」

小さな影もソファから立ち上がると、背を向けて部屋を出て行くとした。

「それともう一つ」

今まさに立ち去ろうとする背に向けて、冷酷な通達が伝えられる。

「これで一失態なわけだ。もし次も失敗したとすれば、俺は新しい司令塔を用意することにする。当然、貴様が光の元に帰る道も消えるな」

沈黙が流れた。

やがて、ダンベルを上げ下げする音が再び聞こえてくる。

「分かりました」

小さな影はそう言うと、部屋の扉を引き、静かに出て行った。

## #8 通告 It | g a t h e r s | a n d | i t | i n t e r s e c t s

御坂妹は、街中を急ぎ足で歩いていた。

シリアルナンバー  
検体番号10032号、実質最後の実験の被害者である彼女は、  
第10学区にあくまで「歩いて」「向かって」いた。

調整も終わっていないし、何より身体かひだの負担が他の妹達シスターズの比ではないので、走るわけにはいかない。途中で倒れてしまつかもしれないのだ。それにこれなら、苦しいが散歩と言いつつ諷することができる。

御坂妹が第10学区を目指す理由は単純だ。

12057号を助ける。

ミサカネットワークを通して、12057号と少年が襲撃された情報が入ってきた。事態はもう動き始めている。そう判断した彼女たちは、一刻も早く12057号に会うためにこうして急いでいる。

(まったく、ラストオーダー最終信号は何をしているのでしょうか、とミサカは無能な上司に呆れ返りつつボソツとこぼします)

先程ミサカネットワークを切断してから、しばらく打ち止めラストオーダーからの連絡がない。向こうも向こうで活動しているのかもしれないが、教えてもらえない分には何も想像できない。

(まああの小つこいのはああ見えて考えることは考えていますから、とミサカ19090号は10032号を宥めてみます)

不意に、ミサカネットワークを介してメッセージが送られてきた。

その言葉を聞き、御坂妹はあれは考えていても次の瞬間には別のものに興味が向いてしまうのではないか、とか適当な予測を立ててみる。余計なことを考えながらも、足だけはしっかり動かし続ける。

ところで、第10学区に向かっているのは10032号だけではなく。学園都市に残った9人程の妹達シスターズのうち、19090号以外は皆、第10学区を目指している。19090号はカエル医者への言い訳係だ。

(19090号が上手く取り繕ってくれることを信じて、ミサカはミサカの仕事をこなしましょう、とミサカは決意を新たにします)

決意しつつ、足を急かし、街を歩み抜けていくミサカ。そんなミサカの耳に、ふと聞き覚えのある声が飛び込んで来た。

『だから今日はだめだって上条さんは何度も言っているのですが！！！』

『うっさいわねだからアンタのせいだって言ってるんでしょ！！！』

聞き慣れた、少年と少女の声。

続けて、バチィビリビリドガン、と凄まじい音まで聞こえてくる。

ミサカは前方を見やる。そこで、超電磁砲VS幻想殺しの激しいバトル戦闘が幕を開けていた。  
レールガン  
イメージブレイカー

ミサカは溜息をひとつ。

(何でこんな時に彼らと出会ってしまおうのでしょうか、とミサカは困り果てて逃げ道を探します)

弱腰もい感じな考えだが、しかし彼らは、12057号の事を知ったら迷わず助けに駆けていくだろう。ミサカの危機に、命を張ってまで助けに来てくれたのだ。

だから余計に、彼らを危険に晒したくはない。

(本来であれば挨拶のひとつもしていくのが礼儀でしょうが、今は緊急事態です、とミサカは自分を納得させる材料を探します。何ならこの事件を片付けてから会いに行けば問題は無いはずですが、とミサカは決めます)

ミサカはペースを緩めないまま、彼らの方へ歩いていく。横を通り抜ける。大丈夫、気付かれずに済み。

「あれ、御坂妹？」

声を掛けられた。

振り返れば、こちらを見つめる「彼ら」。雷撃バトルは止まっている。

ミサカは溜息をもうひとつ。

(気付かれてしまいました、とミサカは諦めます。何故ここにいるのか、ミサカには上手い言い訳は思いつかなそうです、とミサカは黙っているという選択肢を放棄します)

なんかぐだぐだと頭の中だけで考えつつ、彼らの元に歩み寄りながら、しかしミサカはどこか自分がほっとしているのに気付いた。

一方その頃、檜橋とミサカは、突然現れた小つこい少女と向き合っていた。

背丈は二人の胸にまで届かないくらい。茶色っぽい髪でちょぴんと一房頭のとっぺんが立っていて、それでいて顔つきは誰かさんにそっくりだ。キャミソールのような涼しげな服を着ている。

それで、ミサカがその小さい少女を睨んでいるみたいで何か怖い。

「ラストオーダー  
最終信号、何故あなたがここにいますか、とミサカは確認を取ります」

「簡単に言うと12057号を捕まえに来たよ、ってミサカはミサカは手錠と猿轡に見せかけた輪ゴムを取り出してみたり」

「簡単に捕まるとお思いですか、とミサカは再度確認を取ります」

「ミサカが本気になれば30秒もかからないぜー、ってミサカはミ

サカは両手をわきわきさせてみたり」

それで、よく分からないが軽い口論みたいな状況になっている。

榎橋は完全に会話の外だ。だいたい、この少女が誰かも分からない。というか二人は知り合いなのだろうか。いきなり飛び出たこの行動奇抜少女にミサカは何の反応も示さないし、捕まるの捕まえるのって鬼ごっこみたいな会話をしている。

「で、二人は兄弟？」

何気なく聞いてみたが、何がまずいのか途端に二人からじっと見られた。

「何故ミサカが兄なのですか、とミサカは3度目の確認を取ります」

「兄弟じゃなくて姉妹にして欲しかったかも、ってミサカはミサカは注文してみたり。ちなみに、ミサカは一番小さいけど一番偉いんだよ、ってミサカはミサカは補足してみる」

やっぱりよく分からない補足に、榎橋は勇気を持ってもう一度質問してみる。

「で、そっちの路地裏からいきなり飛び出すとか心臓に悪い登場の仕方をしてここに来た理由は何なの」

「だから今から説明しようと思ってただけど、ってミサカはミサカはちつつちつと指を振ってみたり」

なんか本当によく分からないし、よく分からないうちに怒られた。



小さな少女は、指を振る手を止めると檣橋とミサカとを交互に見て話し出す。

いつの間にか場の空気の流れ方が変わっていた。

「いい、よく聞いてねってミサカはミサカは念を押してみる。まず要点だけ言うと、ミサカ12057号のデータコードにはウイルスコードが隠されていて、あの黒い服達はそのコードを狙って来たんだと思うの、ってミサカはミサカは推測してみた事柄を伝えてみたり。コードには調整に行かないようにという指示が含まれているらしいし、ここはその不正コードを除去するべくミサカとあの人は12057号を追って出てきた次第、ってミサカはミサカの説明終わり」

さっぱりだ。

ミサカミサカと余計な単語が多くて本当に分かりづらいが、要はミサカの頭の中にウイルスコードというものが仕込まれている、ということだろうか。

「その、……ウイルスコードって危ないのか？」

「うん。前にミサカが仕組まれたのは、ミサカの判断力や思考力、自我を奪って世界的な大反乱を引き起こそうとするものだったしね、ってミサカはミサカは過去のデータを引き戻してみたり。今回のも似たようなものかもしれないし、またはもっと危険なものかもしれない、ってミサカはミサカは分からないけど危険なものだというのは確かだと思っ」

「それで、そのウイルスコードはどうしたら発動するんだ？」

「それも分からない、ってミサカはミサカはちよつと情けなくなりながら答えてみたり。何か起爆剤となるものが必要なのかもしれないし、今にも解凍されて動き出すかもしれない、ってミサカはミサカは危機を告げてみる。時間がないかもしれないから急いでるんだよ、ってミサカはミサカは締めくくってみる」

とりあえず。

ミサカにはそのウイルスコードが仕込まれていて、それを狙う謎の組織によって常に危険な立場に立たされているということか。

やっぱりさっぱりちんぷんかんぷんだが、もう今日はどんな変なことがあっても受け入れられそうな気がしてきた。

榎橋がミサカを見やると、黙っていたミサカが口を開いた。

「それで、あなたはミサカに何をするつもりですか、とミサカは問い質します」

ラストオーダーと呼ばれた小柄な少女は、ちよつとだけ黙る。

「12057号のデータコードを塗り替える」

ただし、次にはきっぱりと言い切った。

「そのウイルスコードは解明されなままだけど、別にそれで困る人もいないし、コードさえ消してしまえば謎の組織だって12057号を狙う必要も無くなるよね、ってミサカはミサカは確信を持って言ってみたり」

ミサカは再び黙り込んだ。

檣橋としては、何か気に食わないことでもあるのかどうか想像もできないが、データコードを塗り替えることができれば問題は全て消えるということか。

なら簡単なことだ。

「どっやって?」

「テストメント学習装置を使って書き換えるか、それより早い方法もあるけど

」

「ミサカは」

論ずる声を遮るように、ミサカの口から言葉が紡がれた。

「ミサカは、頭の中を書き替えられたいとは思いません」

それだけ言うと、ミサカはいきなり背を向けて走り去っていった。思わずポカンとした檣橋とラストオーダーだが、先に我に返った檣橋が急いで後を追う。

「待てよ!」

さらにその後を追おうとしたラストオーダーだが、ふと、後ろに足音を感じて振り返った。

路地裏から、黒い装甲服を着た部隊が現れてきた。12057号

を追ってきたのだろうか。完全武装すぎて、こんな路地裏にさえ強烈すぎる危険さを放っている。

一瞬の間が開き、チャカツ、という音がして照準がラストオーダーに集まる。

12057号を追いかけたいのは山々だが、こいつらにここを通すわけにはいかない。

榎橋はミサカの後を追って走っていた。

辺りはだんだん暗くなっていく。さっき走ったばかりなのにまた全力疾走というのはかなり厳しいが、ミサカの背中を見失わないようにとにかく全力で走り続ける。

と、急に頭上に影が落ちる。周りを見てみれば、どうやら工事現場の中に入ったようだ。

鉄骨の骨組みが露骨にむき出しの、人気の無い寂れた工事現場。その中を突っ切っていくミサカに向かって、榎橋は「ミサカ！」と呼びかけた。

声は響き、前を行くミサカの足が止まる。

やっこの事で追いついた榎橋は、腕を掴んで振り向かせる。

「いきなり逃げ出すなよ」

「……」

「頭の中を書き替えられるつもりはないってどういうことだよ。そうすれば危険が全部無くなるんじゃないのか？」

詰問する檜橋に、ミサカはむしろ奇妙なほどの無表情で答える。

「頭の中を書き替えるということは、一度記憶も全て消して、ゼロの状態に返すことを意味するのです、とミサカは告げます」

な……、と檜橋の言葉が止まる。ミサカは続けて、

「確かにミサカネットワークを経由すれば、数秒も経たずに記憶の復元が可能です、とミサカはとりあえず肯定します。しかし」

ミサカはそこで一旦言葉を切った。檜橋には、表情が少しだけ崩れたように見えた。

「ミサカの記憶はミサカだけのものであり、自分の記憶は誰かから貰うものではありません、とミサカは譲らない姿勢を示します。たとえば書き替えるなら、新しい記憶を自分で作りたいと、ミサカはそう思うのです」

「それは分かるけど」

「ですがミサカには、無くしたくない思い出があります、とミサカは吐露します。身勝手なのは承知していますが、それでもミサカは譲りたくありません」

なんというか、人間らしい。

ミサカを前にして、檜橋はそんな感想を抱いた。

「でもさ、ならどうするっていうんだよ。ウイルスコードってのは危険なものなんだろう？」

檜橋の素朴な問いに、ミサカは答えられなかった。

自分のせいで大勢の人に迷惑がかかっていることは分かっているつもりだ。思えば違和感があった。どうして自分だけ調整を受けたと思えないのか。自分が他の妹達と違うのはあたりまえだ。そもそも頭の中身が違ったのだから。

そして自分がデータコードの再入力を拒否し続ければ。この頭の中にあるらしい、危険なものがいつか暴れ出すのだろう。それはミサカネットワークを利用するものかもしれないし、ミサカ単体が爆弾と化するのかもしれない。

そんなことは聞いてすぐに理解できた。

でも自分はこの記憶を失いたくない。誰かの脳を経由した自分の記憶なんて、もはや言われて覚えた知識と何ら代わりは無いじゃないか。そのことを、最終信号もこの少年も理解できないのだろうか。それは違う、という声が聞こえた気がした。結局は自分が変な意地を張っているだけなのだ。さつさとデータコードを洗い流せば、それで事件は解決する。何がいけないのか。自分は変なのだろうか。自分単位でしか考えられないなんて、じゃあ自分のことなど投げ出して妹達を助けに来てくれた彼らはいったい何だというのか。

自分が生きてきた証とも言える、記憶を手放すのが嫌だと考えるのはいけないことなのだろうか。

なんだかミサカは、自分がひどく独り善がりで、独りぼっちなそんな気が

「ミサカ？」

ふと我に返ってみれば、自分の顔を心配そうに覗き込んでいる少年が目映った。

「どうかした？」

気付けば、ミサカは両手で頭を押さえてしゃがみ込んでいたのだ。つた。

榎橋は、心配そうな表情のまま「大丈夫か」と聞いてくる。

この少年は、自分のことをどう思うだろう、とミサカは考えた。自分主体でしか考えられないこんな人間だと知ったら、がっかりするのだろうか。

ミサカは額にあるゴーグルに触れてみる。少年が割った（と思われる）ガラス面をなぞると、ひび割れがすぐに分かった。

ミサカはそばに座っているしろねこを見た。しろねこは見られていることを全然意識していないかのように、前足を舐めて毛繕いしている。

やっぱり。

こうして手に入れられた自分だけの思い出は、自分だけの記憶として取っておきたい。

が。

次の瞬間。

風切り音を立てながら勢いよく回転して飛んできた謎の物体が、ミサカの頭にぶつかってきた。

いや、ぶつかってきた程度ではない。激突した。

「ぐ……ッ!!」

今度こそ、ミサカは頭をしっかりと押さえて突っ伏す。ガンガンに響いて、頭が割れるように痛い。辛うじて辺りを見てみると、工事に使われる予定の物が、短い金属パイプがその辺に転がっていた。

「ミサカ!」

少年の驚きと焦りが混ざったような声が届いたが、ミサカには応えられない余裕はない。

続いて、さっきのを追うかのように2つ目の風切り音が聞こえる。

とっさに頭だけは庇ったミサカだが、

ドム、と。



比べものにならないほど大きな衝撃が、脇腹を走った。見れば、鉄パイプの5倍の重さはあるつかという鉄骨だ。こんなものが頭に当たっていたら文字通り死んでいた。

といっても、今のミサカも激痛のあまり声が上げられない。動くこともできない。歯を食い縛って耐えるのが精一杯だ。

さらに、3つ目の物体が風を切る音。

思わず身を固めて、衝撃を待つミサカだったが、衝撃は来なかった。

飛んできた金属物は、すぐ手前で急に勢いを止めると、グウオンと暴風のような音を上げて、来た方向にそのままのスピードで引き返していく。

ガアンと、遠くで金属と金属のぶつかる音がする。

「誰だよ」

すぐ側で、とてつもなく静かな声が出た。

その声はとても静かなのに、なんだか今にも爆発しそうな気配を秘めている。周りを漂っている空気まで、それが感染したかのように感じられた。

ミサカは、痛みを堪えてゆっくりと顔だけ動かす。

今日さんざん見慣れたはずの少年が、始めて見せる表情をしていた。

「人に金属パイプだの鉄骨だの投げつけてくる非常識な奴は」

低く静かな声が、閑散とした工事現場を抜けていく。

「こここそ隠れて撃ちなんかしてないで出てこいよ」

応えるものは無い。

静寂がその場を支配してしまったかのように、何の音すらも聞  
えない。

「……………」

二人はそのまま長い間固まっていたが、やがて不意に檣橋が肩の  
力を抜いた。彼はミサカを見やる。

さっきまでの表情は、すっかり消えていた。

「ここ、もしかしたらスキルアウトの縄張りか……黒いのは銃持っ  
てんだからこの辺に落ちてるものなんか使わないだろうし……別の  
場所に行った方が良くもしれない。頭、大丈夫か？」

「何とか痛みは引いてきましたが、とミサ…痛ッ」

手を添えてミサカを助け起こしながら、実は頭蓋骨にヒビが入っ  
てたりしないだろうか、と檣橋はとても不安になった。

もしこれが、謎の組織でもスキルアウトでも何でも無い、ただの  
イタズラだったりしたら下手人をブラジルまで飛ばしてやる。

「一応病院まで行った方がいいかな？　じゃなければせめて安静にしておかな　」

心配故<sup>ゆえ</sup>の忠告は、最後まで言い終えることが出来なかった。

「まったく、早く警戒を解きすぎだよ。もし私がスナイパーだったらとっくに任務遂行だね」

声がした。

あえて言うなら、少女の声だった。

誰の声かと辺りを見回す暇も、能力を使う暇も無かった。

ミサカが微妙に切羽詰まって何かを言っていたような気もする。

ガツツ、と、何かとても硬いものが後頭部に命中したような気がして、

それがなんなのか確認する事も出来ず、

次には自分の体がグラリと前に傾いていて、

……黒い波が急速に迫ってきて、そのまま檣橋の意識は深く深くに落ちていった。

## #9 最賀来西研究所 Destination

「……それで。今その12057号はどこにいるんだ？」

「工事現場の付近を走っていた情報は入ってきましたが、それ以来ミサカネットワークへの接続がプツリと……もしかしたら意識が途絶えているのかもしれませんが、とミサカは状況報告をしつつ推論を述べてみます」

「工事現場、なあ……」

上条と御坂妹は、先程第10学区に入ったが、なおも勢いは緩めず急いでいた。

急ぐといっても御坂妹に合わせて早歩きなのだが、二人して競歩のようなスピードで街を早歩きで抜けていく。

目指すは第10学区の工事現場。

もともと第10学区は研究施設などが多い場所なので、それほど工事の頻度は多くないが、逆に言えば工事現場というヒントで場所が特定しやすいということでもある。

ちなみに美琴はというと、話を聞いた途端に急に不機嫌になり、何故か上条に向けて本日最高クラスのビリビリを叩きつけてどっかへ行ってしまった。

（俺なんかマズいこと言ったのか？ 早くそいつを助けに行こうくらいなら言った覚えがあるんだけど……）

とかさつきまで考えていた上条だが、今一番重要な問題はミサカ12057号のことである。

「しかし、調整を受けない妹達シスターズなんているんだな。おまえらってみんな同じ顔で同じ性格で同じ事考えてるようにはしか見えないから、今も少し半信半疑なんだが」

「妹達シスターズの中でも調整を受けないという選択をしたのはミサカ12057号唯一ですから、ミサカ達から見てもこの事態はイレギュラーです、とミサカは解説します」

ふーん、と上条は納得したのか納得しないのか判断しかねる声を出した。

「ところで工事現場の場所は特定できているのですか、とミサカは確認を取ります」

「携帯電話マップには工事予定地って書かれてたのがあったけど。今そこを目指してる。くっそー、だけどやっぱ歩きだと遠いモンだな」

「それは暗にミサカが迷惑だと言っていますか？ とミサカはじろじろと睨みつけながら問い質します」

「なんつーか……。おまえには睨まれてる感なんて全然しないんだよな」

とある路地裏。

路地裏といえは不良のケンカが名物だが、今この路地裏には、どう見てもただの不良には見えない黒装甲が大勢転がっていた。

そしてそんな中に立つ白い影と小さな影。

「……一人でカッコつけて殺されそうになってんじゃないぞクソガキが」

「か、カッコつけてなんかないよミサカは真面目にこの先は通さないうって思って立ち向かったただけだもん！ ってミサカはミサカは激しく抗議してみる！」

「こっちはオマエに言われて研究所に残ってる奴らをわざわざ潰してきたつづのに、今度は勝手に戦いを始めてる馬鹿がいるしよオ。人様の仕事ばつか増やすんじゃないぞねエよ。つかオマエは電撃使いじゃなかったんかよ」

「う……っ、でも何だかこの人達には全然電撃が通用しなかったんだもんってミサカはミサカは弁解してみるんだけどどうわ信じてもらえてないっばいよ嘘じゃないっば！」

「<sup>イタ</sup>ぶんぶんと手を必死に振って弁解を試みる打ち止めだが、<sup>ラストオーダー</sup>一方通<sup>アクセラレ</sup>」

行は全然興味なさそうに全てスルーする。

「そんで。今度は12057号はどこに行ったんだよ」

「うう、ミサカの言ってることは全部無視？ ってミサカはミサ」

「さっさと言え」

「……ぐす、……さっき12057号は工事現場の方に向かってっ  
たから、たぶんその辺にいますと思っけど、でもその前にミサカの話  
を聞」

「さっさと行くぞ」

「……………ミサカ  
はミサカはとつてもやりきれなかったり」

暑い。

ミサカはぼんやりとした意識でそんなことを考える。

ここはどこだろうか。

少し首を動かして辺りの様子を見てみる。動いたことで、収まっていた頭のズキズキする痛みが再び振り返してきた。

ここは、駐車場のように無骨な……研究所か。ミサカがそう考えたのは、この部屋には無機質な研究機械が結構な量置いてあったからだ。壁も床もむき出しのコンクリート。向こうには重そうな金属扉があり、床には印刷用紙が何枚も散らばっている。

ミサカは立ち上がるうとして、両手と両足が縛られているのがついた。いかにも丈夫そうな縄だ。

……こんなもので自分を拘束しようと思っていたのだろうか。ミサカは僅かに眉をひそめると、バチイと火花を散らした。あつという間に縄が焼き切られる。

絡まる縄を振り落としつつ、金属扉の方に近付いてみたが、扉には鍵がかかっていた。電子ロックなら良かったのだが、ご丁寧に南京錠が3つも付いている。他に出入り口となる場所は無さそう。つまり密室か。ミサカは諦めると、ふと床に置いてある印刷用紙を見してみた。

紙には、インク字で『軍用量産型能力者 シスターズ 妹達』と題名が大きく印刷されている。やはり自分を狙って、情報集めでもしていたのだろうか。ウイルスコードを手に入れるために。

とそんなことを考えながら用紙に目を通していたミサカは、ふと一番最後の紙の隅に目を留めた。

そこには、「最賀来西研究所」と印刷されている。



最賀来西<sup>さいかく</sup>。

その情報は、ミサカネットワークを通して全てのミサカに伝わった。

御坂妹は急に方向を変えた。

「ちよ、おい！ どこ行くんだよ！」

御坂妹は振り返らず、歩幅も緩めないまま告げる。

「ミサカ12057号の現在位置が最賀来西研究所であることが分かりました、とミサカは報告します」

「さいかく？ って、おまえその研究所がどこだか知ってるのか？」

「ミサカは研究所で生まれたので学園都市<sup>こく</sup>の大概の研究所は知っています、とミサカは即答します」

ラストオーダー  
打ち止めは急に顔を上げた。

「む、最賀来西研究所……。ミサカはミサカはこの名前に聞き覚え  
アリってことで一刻も早く到達するべく駆けだしてみる！」

「ああ？ ってちよつと待てコラ。そつちはオマエの言う工事現場  
と方向が違うんじゃないのかよ」

「でもでも今受け取った情報によると、12057号は最賀来西研  
究所にいるみたいなの、ってミサカはミサカは今にも走り出しそ  
うに足踏みしながら答えてみたり。目指すところが変わったのほら一  
方通行も早く早く、ってミサカはミサカは急かしてみる」

「…………たく、面倒くせエ」

(最賀来西研究所……)

ミサカはその一枚のプリントを凝視しつつ、考えあぐねていた。

どこかで聞いたような気がするのだが、何故か思い出せない。ど  
こで聞いたことなのか、この研究所はどこに位置する研究所なのか。

…………思い出せない。

ミサカは諦めると、そこかしこに散らばっていたプリント類を律  
儀に集め、机の上に置いた。

机もまた古い。こんな感じの机も見たことがあるような気がする

のだが、どうしてか何も思い浮かばない。

(これもまた、ヘンテココードの影響だというのでしょうか、とミサカは仮説を立ててみます。そうだとしたら必ず下手人を突き止めて縛り上げます、とミサカは固く決意します)

よく分からん決意をしたミサカだったが、その時、

「……観察力はあつても注意力は無いんだね」

呆れたような声がした。

背筋に冷たいものが走り、ミサカがバツと振り返ると、壁際に少女が立っていた。いや、立っているというより正確には寄りかかっている。まったく気付かなかった。

少女は作業服と体操服を足して2で割ったような、運動のしやすそうな格好をしている。

「まあ、電子ロックのある近代研究館アドバンスフロンセンターよりここを選んだのは正解だったけど、やっぱり即席で縄使うよりもちゃんと拘束具持つてくれば良かったよ」

少女は壁から背を離し、言う。

ミサカは信じられないものでも見るかのように固まっていた。どうしてこんな場所にいるのか、としてはミサカのコードと関係があるとは思えない。だがこの少女は文字通り、幼い。

それにミサカはこの少女を知っている。

というか、さつき初めて会った。

「まあいいや。それと、ここがどこだか知りたい？　ここは、かつて暗闇の五月計画っていう実験が行われた場所の一つなんだ」

さつきは、確か黄色っぽくてタンポポみたいな衣装だった。

「今は、その部屋への入り口はコンクリートでガッチガチに固められて閉ざされてるんだけどね」

パリオンとかいう清掃ロボ……いや、清掃ロボに勝手にパリオンとか名前を付けていた。

「コンクリートで遮られてても、この下には地獄がまだ残っているんだよ」

その子はちょっと変わってたとも思ったけど、逆にこの街ではそれが少女を街に溶け込ませていた。

どこにでも有りそうで無い、微笑ましい奇快な日常の1シーンだった、のだが。

今の少女は、完璧に「その時」を打ち砕いた。

はつきりとする。実験の時にも感じた、暗部のおいが部屋を包む。

「ここも今から、あなたにとっての地獄になるのかもしれないけど」

恐怖でも驚愕でもないもののせいで体が動かないミサカに対し、にっこりと少女は笑った。

## #10 透明な危機 Pursuit

ストストスト。

無人の工事現場から、小動物でも移動するような音が微かにする。

この区域を巡回中の風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>は、そんな音を耳にとらえてふと足を止めた。

動きを止め、耳を澄ませる。

ストスト、サ。

とても軽い音だ。人間の足音ではない。

様子を見てきてみるかどうか、風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>は僅かに逡巡したが、『』という鳴き声が聞こえてきた途端にそれは消えた。

「なんだ猫か」

そろそろ暗くなってきたし、家にも帰るのかもしれない。いや待<sup>ジャッジメント</sup>て、猫はもともと夜行性だったか。そんなことを考えながら、風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>は巡回を再開した。

もちろん彼は、中で人が気を失っていることなんて知らない。

にー。

何か聞こえた。

にー。

また聞こえた。

しゃああ。

何か痛い。

にー

「……」

辺りは静かなのに、叩き起こされたような感覚を受け、目が覚めた榎橋はうつすらと目を開けた。ここはどこだろうと少しだけ頭を働かせ、ああ工事現場か、とすぐに思い出す。

彼の横ではしろねこが、時々爪を立てつつ、にーにーとひたすら鳴いていた。

日はもう落ちたのか、辺りは刻々と暗くなってきた。

「白猫？」

榎橋は体を起こすと、怪訝な顔でしろねこを見つめる。

その途端。

「げっ！！ ミサカは！？」

何があつたかを思い出し、榎橋は思わず叫んで跳ね起きた。その声は、静まりかえった工事現場にやけに大きく響く。ついでに跳ね起きた途端に撃たれた頭がズキンと痛んだが、そんなことは気にしていられない。

慌てて辺りを見回してみたが、ミサカはどこにもいなかった。いるのはしろねこだけだ。

別の場所にいないかと、一步踏み出した榎橋の足に、コッソと何かがぶつかった感覚が伝わった。

「？」

視線を落として足元を見てみれば 見覚えのある、軍用ゴーグル。

途端に、とてつもなく嫌な予感が榎橋の体中を駆け巡った。

拾う。ひび割れを確かめる。確かにミサカのだ。

落としたことに気付かなかった可能性もあるかもしれないが、たぶんそれは違う。きっとミサカは落としたのに気付いていたけど拾えない状況だったのだ。

榎橋は反射的に辺りに目を走らせた。

さつき、金属物を遠くから投げつけてきた奴。あれはスキルアウトなんかよりもっと重いものだったかもしれない。

「誰なんだよほんとに……」

軍用ゴーグルを握り締め、櫓橋は力なく呟いた。ミサカの行き先は分からない。

と。

今までにやーにやー鳴いていたしろねこが、突然伸び上がって軍用ゴーグルを掴んだ。

ペキ、という軽い音がする。

「バカおまえ爪立てんなよ割れるだろ！」

既に割れているのだがそんなことはどうでもいい。

しろねこはまるで言葉を理解したかのように前足を離すと、そのままお座りをして櫓橋を見上げてきた。

櫓橋も見つめ返してみる。すると、目があった途端にとてつもない案を思いついてしまった。

「……なあ、おまえミサカがどこにいるか分かるか？」

自分でも馬鹿だと思った。

後々になっても笑い話として受け継がれていくだろう。だけど今の櫓橋にとっては関係ない。個人レベルならまだしも、大きな組織



の陰謀ならミサカの命に関わる。

結論から言うと、しろねこは返事をしなかった。

声や音による返事ももちろん、尻尾を振るとか伸びをするとかそういう動作さえも返してくれなかった。

ただ、

さつと立ち上がると、向きを変えてどこかに歩いていく。

「ちよ、おい！」

慌てて後を追ってみる。猫の嗅覚は人間より鋭いはずだが、榎橋はどうも半信半疑になった。さつき軍用ゴーグルを捕まえた時においを嗅いだのかもしれないが、そういう科学的な問題ではなく、何の返事も無しに歩き始めたことが引っかかった。

詰まるところ、なんか返事があってもいいんじゃないかね？ と考えている。

そこは立ち上がって敬礼して『分かりました飼い主さまを探します！』くらいノってくれてもいいじゃないか。

しろねこはスタスタ歩いていく。

「……、このシンデレラが」

榎橋がボソツと呟いた途端、しろねこの足が止まった。

わ、もしかしたら気を悪くしたのかと榎橋はちょっとビビッたが、

そうではなかった。

工事現場の地面は砂っぽくてザラザラしている。足跡が残るほどではないが、例えば乗り入れた車のタイヤの跡が残るほどだ。そんな地面に、真新しい跡がついていた。

まるで砂袋でも引きずったかのような跡が、ずーっとずーっと続いている。

引きずった跡。

榎橋はまたしても嫌な悪寒を感じた。ぶわっと気持ち悪い汗が出てきた気もする。

冷静に考えれば、昼間に何か建築材かそれこそ砂袋でも引きずったという可能性も考えられるだろう。だが、榎橋にはこの跡が人間の引きずられる形に見えて仕方なかった。

「もしかしてミサカは……もう」

言いかけた自分の口を、榎橋は急いで封じた。嫌な想像がはつきりと浮かんだが、すぐに頭を振って追い払う。そんなはずはない、殺すだけなら何も引っ張っていく必要なんて無いはずだ。それに辺りには血痕だって無い。ミサカは気絶しているだけかもしれない。

だけど、どんなに否定の材料を探しても、「しれない」という予想の言葉しか並べられない。

予想じゃ済まされない問題だ。

確かめる度胸はあるのか、という声が自分の中から聞こえた気がした。

当たり前だ、と榎橋は思う。今ここで帰ったところで、気になつてとても眠れたものではないだろう。

それに。

榎橋はしろねこの首根っこを捕まえて抱え、走り出しながら思った。猫の抗議の鳴き声上がるが今は無視する。

まだ、軍用ゴーグルの弁償もしてなければ、誰にも謝つてもいいい。

とある薄暗い一室にて。

先程、子供の影と向かい合っていた大人の影は、また新たな影の前にソファに座っていた。

「アレから連絡が来ましたよ。どうやら目標の12057号を捕獲するに成功したみたいですが」

新たな影は背が高めで、帽子を被っているようだった。

その影からの報告を受けても、ボスらしき影は微動だにしない。

「ですが、何だ」

「偵察部隊によると、どうもその研究所を目指す動きが複数あるようなのですよ。覆面の警備員<sup>アンチスキル</sup>とかでも無さそうだし、こりゃー12057号にはある程度の間関係が築かれていたと考えるのが妥当ですよ。それに、同種らしき他の妹達も同行しているみたいですし。これは案外、大勢を敵に回したかもしれませんですね」

「大勢を」のところで、その影は含み笑いの雰囲気醸しながら報告を終えた。

ボスの影は呆れたような息を吐く。

「貴様、その話し方は何とかならんのか」

「おや、何か問題でもおありですか？　そもそも私を計画に引っかけり込んだのはあなたですよね」

突かれ、ボスの影は僅かに黙り込む。

帽子の影は構わずに続けた。

「それにしても、妹達<sup>シスターズ</sup>を利用した能力者<sup>...</sup>へのAIM干渉とは、あなたも面倒なことを考えるのですね。あなたは学園都市にいたい何をされたというのですか」

大柄な影は答えない。

「正直、学園都市中の能力者全員を対象とは、なかなか賛同しかねる計画ですけどね。私もアレも対象に含まれる訳じゃないですか」

「貴様はどうせ学園都市を脱出しようと企んでいたのだろう。丁度良いだろうが」

部屋の中を、沈黙が流れて通り過ぎていった。

「まあ、学園都市というものには私も辟易していたところなんですけどね。さてどうしますか。ああ、私は研究所を目指す輩を取り除いてくることにしますか」

勝手にまとめると、帽子の影はすぐにも部屋を出て行くつもり。

「では俺は、12057号の元に向かうでしょう」

大きな影はようやく動きを見せた。

ソファから立ち上がる影に、帽子の影は少し驚いたように声を掛ける。

「しかし、アレがもう相手をしているではないですか」

「あのガキは捨て駒だ、貴様も分かっているだろう。もともと、直接的に戦闘をするには向かない奴だ。子供だからな」

「はて？ それではアレとの取引はすべて建前だったのですか？」

答える声は無く、ダンベルの音が返ってきた。

「……なるほど」

帽子の影はニヤリと笑い、そのまま踵を返して部屋を出て行った。

# 1 1 火炎発射 Fire Launcher

「……………」

榎橋は、無言で目の前の建物を見上げていた。

最近の新型の研究所よりも少し古い感じはするが、それでも立派な研究所だ。

その入り口たる金属の扉はかなり頑丈そうで、たとえ5メートルのクが突っ込んだとしても何ともなさそうだと思える程にずっしりと構えていた。

榎橋は耳を澄ませてみる。

跡はここまで続いていたが、もし間違いだったらごめんなさいでは済まない。なので榎橋は争う音でもあるかどうか確かめようと思っただが。

突如、何かがぶつかる音とバチィという危険な音が響いた。

(ミサカの、電撃！)

間違いない。ここであっっていたんだ。

それに、争う音が聞こえるということは、ミサカはまだ無事だ。

思わずほっとしかけた次の瞬間。

ズツドオオン！！ という、爆発したかのような轟音が金属扉さ

えも揺るがせて飛んできた。

「!?!」

これはただごとじゃないと感じた榎橋は、しろねこを脇に降ろし、辺りの空中の制御に意識を集中させる。

ズツバアアアア!! と2度目の轟音が鳴った。それは、建物内の爆発だけではなく、金属扉が空気圧に負け、錠ごと内側に吹っ飛んだ音も混じっていた。

それと同時に、榎橋は台風でも通り過ぎたかのような研究所内に勢いよく踏み込んだ、が。

目の前に、何かが砲弾のような速度で迫ってきた。

とっさに空気の壁を築き上げて身を守った榎橋だが、飛んできた物体は、空気の壁をクッションにして床に崩れ落ちた。

榎橋が、その正体に気付くまでにかかった時間は数秒。

「ミサカ!?!」

慌てて駆け寄ると、横倒し状態のミサカは辛うじて意識を保っていた。その目は焦点が定まっていなかったが、確かに榎橋の方を見ている。

「あなたは」

「俺のことは誰だか分かるだろ。それより大丈夫か、ああ大丈夫なわけ無いよなクソったれ!」



思わず変なことを口走ってしまった榎橋は、少し深い呼吸をして気を鎮める。

ミサカには目立った出血はないが、体力は削り落とされているのが見て分かるし、何故か火傷のような痕がいくつもできていた。

「ほんつとに　　誰なんだよ！」

叫び、おそろくいるだろう首謀者の方へ榎橋は向き直って。そして、動きを止めた。

そこにいたのは、笑みを浮かべたただの少女。

こんな場面とはあまりにもかけはなれた、幼い少女だった。

「おま……君は！」

「おまえ、でいいと思うけど。私は今、君にとっての「敵」のポジションにいるはずだから」

啞然として動かない榎橋の方へ、少女は微笑んだままそんなことを言いながら、無防備に一步二歩と近付いてくる。

榎橋は、凍り付いたかのように足も口も動かない。

「それにしても、3時間くらいは寝てもらうつつもりで気絶させただけだなあ。どうも一般人相手だと精度が鈍っちゃうよ。まったく、運が良いんだか悪いんだか」

「こんな、ところで何やってるんだよ」

絞り出すような檜橋の問いに、少女は気軽に答える。

「仕事」

「……何のだよ」

「それは企業秘密だけど。とある組織の一員だよ、私は」

「誰だ、おまえは」

「あはは、なんかさっき街角で会った時と逆になってるよね」

少女はあどけない笑顔のまま、その歩を緩めずに言う。

「私の名前なんてとっくに忘れられてるよ。今はパピーなんて呼ばれたりするんだけど」

名前なんて無い。

その言葉に、檜橋は一瞬、この少女とミサカが重なって見えた。

「で、またの名前をファイアランチャー火炎発射とも言うんだけどね」

「パイロキネシスト発火能力者か……」

「そう。まあ能力レベルなんて詳しいことは長いこと測ってないから分からないんだけど、そんなことは置いといて。邪魔をする君はここで排除させてもらうから」

ファイアランチャー  
火炎発射という、その言葉通り。

少女がこちらに向けた手の平から、いきなり炎の球体が放たれた。

「う、わ!？」

榎橋は慌てて空気の移動による「風」を起こし、その炎を何とか防いであらぬ方向へ吹き飛ばす。

弾かれた炎の球はコンクリの壁に当たり、ジュウツと鳴ると焦げ跡を残して消えた。

「さすが高位能力者……羨ましいよ」

呟くような少女の声に、榎橋は少し怪訝な表情で少女を見たが、

「だけど身体能力をおろそかにしちゃあね!」

トン、という床を踏む軽い音が聞こえた。

ふっと少女の体が霞んだかのような感覚に、榎橋は疑問を抱いたが、

次には、体中に衝撃が走っていた。

「……ッ!」

自分の体が飛ばされる感覚を、榎橋は初めて味わった。

回し蹴りでも食らったかのように。吹っ飛ばされた体が壁に激突

すると同時、きつい痛みが体中を走った。

あの軽い音は、少女が踏み込んだ音。そして檜橋が気付いた時には、既にその体は吹っ飛ばされていた。

硬いコンクリに衝撃を返され、さらに頭の疼きまで始まり、檜橋は歯を食い縛る。

「遠慮する事なんてないと思うよ、敵同士なんだからね」

相変わらずの楽しげな声に、檜橋はちらりと視線を上げた。

その先では、少女がこちらへ歩いてくる。足取りも軽い。

「失いたくなければ、敵に容赦をするな、かな？ これこの世界のモットー」

「……何で」

何でおまえみたいなのが敵なんだ、と檜橋は言いかけたがやめた。それは彼女だけに当てはまる話ではない。たとえ、彼女ではなくて大人が首謀者だったとしても、同じ事が言えるはずだ。

相手が子供だから許されるわけでもなく、相手が大人だから罪が重くなるわけでもない。

というか自分は何を考えているんだろう、と檜橋は思った。こいつは、「少女」という殻を取っ払って考えれば、コードなんてもののためにミサカを打ちのめした奴なのだ。

そう思うと、体中に僅かに力が入った気がした。

コンクリートの壁に背を押しつけつつ、檜橋は立ち上がった。

「失いたくなければ、ね。分かった、遠慮しないよ」

途端に。

辺りに散らばっていたコンクリートの破片、金属扉の破片などが舞い上がると、ものすごい速度で少女へ突っ込んだ。弾幕とも言えるような、逃げ場のない攻撃が少女を襲う。

が。

破片は少女に突き刺さるところか、掠りもしなかった。

いつの間にか、少女の前には盾となるように清掃ロボが割り込んでいた。破片はその清掃ロボのボディに食い込み、そこで止まっている。

なんでこんな場所にまで清掃ロボがいるのだろうと、檜橋は少し首を傾げてしまった。

「何で私が清掃ロボに餌なんかあげてたと思う？」

それに答えるかのように、機体の向こう側から声が聞こえる。

「まあそのまんま、餌付けって意味だね。あの餌の中には小さな機械が混ざってて、それがロボットの制御を奪ってラジコンと化すわけなの」

おそらくは清掃ロボの裏で、楽しげに説明する少女。清掃ロボは完全自主行動を取っているため、管理人もどのように動くかは把握していないのだろう。だから自由に使える。

だが、檜橋は聞いていなかった。

突如、横からぶつかってきた別の清掃ロボに突き倒され、思いっきりダメージを食らっていた。新たな敵兵の不意打ち。つまり、聞いていられなかったというのが正しい。

「パリオンは結構便利だよー」

機体の陰から、ふらりと出てきた少女の手には、遠隔操作のリモコンが握られている。

「とっても役に立ってくれました」

「！」

檜橋の元へ、炎が迫ってきた。

付き伏せられた状態の檜橋は、床を転がるようにして炎を避ける。

さっきまで檜橋がいた場所には焦げ跡が出来上がった。

転がる勢いを利用して体を起こし、床に手を付いた状態で、檜橋は浅く息を吐く。

「趣味の悪いペットだな。どこの掃除大好き人間だ」

「うるさいなあ」

対して、少女は手の中のリモコンをくるくる回すと、

「人形趣味のお兄ちゃんに言われる筋合いなんてないよ」

その中のボタンを軽く押す。

それを引き金にして、清掃ロボと炎の球と、鋭い破片と吹き荒ぶ風が同時にぶつかった。

ゴ、ウツ！！ という風鳴り音と燃烧音が混じり合い、爆風が辺りを均等に吹き抜けていく。

絶え間なく放たれた衝撃波に、檜橋は思わず腕でガードをして目を閉じたが、

「あっ」

声に顔を上げれば、少女の手から風がリモコンを奪い取ったところだった。その一瞬を逃すことなく、檜橋は破片でリモコンを貫く。

バキツ、ジバチツという音が鳴り、リモコンはあっけなく砕けて床に散らばった。

風がすっかり収まってから、檜橋はやっと立ち上がった。

「これで清掃ロボ達も無理矢理の操縦から解放されて喜ぶだろ」

「うーん、これ作るの結構苦労したんだけどなあ」

少女は残念そうな色を声に滲ませながら、残骸の散らばる中を歩いてきて、リモコンのボタン部分を摘む。すぐそばに榎橋がいるというのに、警戒も何にもないその動作に、榎橋は思わず眉をひそめた。

「ああそう、一つ聞いていい？」

今度は少女の方から声を掛けられた。

榎橋はいつでも炎を吹き飛ばせるように身構えつつ、何だよと適当に応える。

「君は何であるの人形のために戦おうと思ったの？」

人形。

それはおそらく、ミサカのことを指した言葉か。

「誰が人形だ、ふざけんな」

榎橋は吐き捨てるようにそう言うと破片を宙に浮かばせた。もう、遠慮するつもりなど一切無い。

「いやでも、新しいのが欲しければいつでも作れるのにさあ」

その軽い言葉に、榎橋はだんだん自分の温度が上がっていくのを感じた。新しいのが欲しければいつでも作れる、なんてそんな訳があるか。



「逆に聞くよ、おまえがミサカのことを狙う理由は何なんだ。組織とかそういう理由じゃなくて、自分が動いてる理由だ」

「そうだね……自分の命に関わるから、かな。もちろん私だって好き好んで一般人を狙いたいとは思わないけど、組織の命令に逆らったらその時点で私の命は無くなるんだ」

あまりにも純粹な子供過ぎる理由に、榎橋は呆れ返った。

「情けない理由だよな」

榎橋は攻撃態勢も防御姿勢も崩さないまま、そう切り捨てる。

「何が情けないって」

「自分が生き延びるために、人の命を奪うってことだよ、分からねえかよ」

ぐ、と少女の言葉が初めて詰まった。

「好き好んでそういう世界にいるくせに、それを理由にするなんてな」

「好き好んで？」

さらに、少女の言葉が初めて怒りを帯びた。

「すきこのんで？ 本当にそう思ってるなら、かなり腹が立つよ。誰がこんな世界にいたいと思う？ 私は来たくてここに来たんじゃない」

「ああそう」

榎橋は取り合わない。

だが少女は止まらない。この子は別に榎橋と話がしたいのではなく、誰でも良いから胸の内にある考えをぶつけられる相手が欲しかったんだろう。

「よく分かってるよ、自分がどんな人間でどんな非人間的な行動をしてきたかなんて。でもそれが生きていく方法なんだよ。そうしないと生きてはいけないんだよ！」

「……」

「君は12057号が大切なんですよ。何で？ この世界の被害者だから？ 私だってそうなんだよ、どうして君は人形の命は助けようとするのに、闇の人間だからって私のことは助けようとしてくれないの!？」

「……」

「どうせみんなそうなんだよ、まず自分のために動いてるんだ！」

同じ事をしてる君に、何で私が責められなくちゃいけないの！ ね

え 聞けよ!!！」

ついに少女は爆発した。それも、今更に気付いたかのような怒鳴り方だ。

榎橋は疲れたような溜息をついた。少女が言っていたのは、小さ

な幼い願望。少女の気持ちはなんとなく理解できる。だが、そんな話は脇道に過ぎない。

榎橋は、真つ直ぐ少女に向かって言った。

「そう思つたら、誰かに助けを求めたことはあるのか」

「……ッ」

「まだ挑んでもいないんだろ」

「……」

あれだけの覇気を宿しておきながら、言われただけで、一瞬にして少女は黙り込んだ。

「自分で勝手に限界を決めて諦めて、挑戦しないまま、絶対抜けられないか思つてたんだろ。馬鹿じゃないのか。

じゃあミサカは何なんだよ。スタートラインにも立ってない奴が、よく言つよ」

「……、……」

少女は何かを言おうと口を開きかけたが、何も言えずにまた閉じた。黙つたままの少女に榎橋はなおも追い打ちをかける。

「認めるよ、俺は自分の欲だけで動いてる。だけどそれがなんだよ、他人の領域に足を突っ込まなければ、まだ日本国憲法基本的人権の範囲内だ。でもおまえらは違う。はっきりミサカを狙ってんだろ。だったら俺は抵抗する。それで、前におまえがいる以上、敵として

しか見れないよ」

「……そう」

その目に強い光を宿して、少女はようやく立ち直った。ポツ、と両手の平に炎が生まれる。

ギラギラ、という表現が相応しい。そして手の炎に負けなくらい、その瞳も燃えていた。

「なら私も自分のやりたいようにやる。挑戦するよ、まずは君をコッテンパンにやっつけてからあアアアアああ!!」

思い切りいきり立った少女に、檜橋は一言だけ告げた。

「いい夢だな」

ビュオツ!! と、風と炎が高速で交差する。渦を巻くようにぶつかり合った二つの攻撃は、混ざって触れあい、そして爆発した。

またしても吹き荒れた風に、檜橋は僅かに後ろへ下がる。

その隙を見て、少女は前へ踏み込んだ。

体当たり気味の蹴りを叩き込むため、片足を軸に力を溜める。膝を前に傾けて突撃する体勢のまま、少女は檜橋の懐まで踏み込んだ。

（入った!）

そう思った。

が。

振りかけた足は、不自然な位置で急に止まった。自分の意志ではない。何もない空間で、まるで足が見えない手に掴まれたかのように、ガツチリと動きが止まって動かない。

(ということとは)

動けないまま、少女は上を見上げる。

榎橋は微かな笑みを見せ、そして言った。

「スカイデイレクシオン気空操動を、ただの風使いとするのは間違ってるだよ！」

ギュゴバツ、と。

荒れ狂う暴風が、少女の体を吹き飛ばした。足の裏さえ一度も床に着くことなく、少女の体はノーバウンドで灰色の壁へと叩きつけられる。

「が……ッ！」

激痛と、じんじんする痺れが体中を襲った。何故か頭だけは打たずに済んだが、ビリビリと痛みが走る体は動かない。体は倒れることも出来なかった。

ぼんやりと、風の凶器を手にした少年がこちらへ走ってくるのが見えた。それが分かって、体は動かなかった。スカイデイレクシオン気空操動の能力だけではない。気持ちの方が体よりも優先して、結果として指すら動

かない。

これは勝てない、と少女は感じた。

戦力とか作戦とか、そういう具体的なものではない。少年は今、反撃を防ぐことなんて考えていなかった。ただ早く決着を付けるために、後ろにいる瀕死の少女を助けるために、少年は攻撃にのみ全力を注いでいた。

あんな風に、自分の命よりも誰かの命のために戦える人間に、勝てるわけがない。

まず自分の命から考えてしまった、自分には。

檣橋の手にある風の武器は、渦を巻いたドリルと化していた。あんなものが的中すれば体は半分に分かれるだろう。

怖くはない、けど。

出来ることなら、死ぬ前に、当たり前の日常を、一日で良いから過ごしてみたかった。

そう思い残すと、少女は目を閉じた。

次の瞬間、

ズドン！！ という轟音が響き、少年と少女は激突した。

## #12 黒幕 The | l a s t | e n e m y

「12057号は無事か!？」

「はい、12057号はかなりのダメージを受けているため時々記憶が飛んでいます。あの少年はどうやら立派に英雄ヒーローとなってくれたようです、とミサカは報告します」

「どこで獲得したんだそんな単語」

人気が無くなってきた狭い道に、二人の声がよく響く。

上条とミサカ10032号だ。

「もうすぐ、だよな。最賀来西研究所つてのは」

「はい、あとはあの角を曲がるだけです、とミサカは研究所ナビをしつつ歩を速めます」

そろそろ息が切れてきた上条とは反対に、御坂妹は怪我人のくせにまだ疲れていなさそうだ。なんていう体力か、と上条は思ったが口には出さないでおく。

「だけどもあ、もう大丈夫なら急ぐ必要もな」

上条が言いかけた台詞は、途中で途切れた。

「!」

原因は巨大な看板。

どこかのパチンコ屋にでも使われているようなでかい看板が、二人めがけて落ちてきたのだ。

二人はとつさに後ろへ飛び退いて直撃は避けたが、看板はアスファルトを砕くと辺りの地面を激しく震動させた。立ってられない衝撃に、上条は膝をついてとりあえず揺れの収まりを待つ。

「何だ！ 地震か！？」

振り向いて御坂妹を見たが、御坂妹は首を振る。

（何だ今の……）

揺れが小さくなっていき、上条が立ち上がった、その時だった。

ボズム！ という水風船が破裂するような音に、上条が身構えた瞬間、看板を向こう側から突き破り、何か巨大なものが飛んできた。

「！」

それが何か判断する間もないまま、迫り来るものの上条は速攻で右腕を振った。バァン！！ という激しい破裂音が炸裂し、それは四方八方に飛び散る。

上条も至近距離でそれを浴びた。

「うわっ……、水？」



「その通りです」

看板の向こうから声が聞こえた。

そちらへ目をやれば、青い帽子を被った背の高い青年が、看板の穴を通り抜けて悠々と歩いてくるところだった。手には、不思議な形に揺れる透明な液体が浮かんでいる。

余裕溢れる動作に、上条は少し眉をひそめる。

「誰だよテメエ」

油断無く上条が問いかけると、その青年は余裕を見せる声で、

「なあに、単なる組織の一員ですよ。そして私はその役割を果たしに来ただけです。というわけで、あなた達にはここで諦めてもらうわけです」

組織。

12057号のウィルスコードを狙う組織だろうか。

「テメエ！」

叫ぶと、上条は右手に力を入れて走り出そうとした。

対して青年は、軽く腕を振り上げる。

後ろから、ジャカツ、という金属の音がした。

怪訝に思つて上条は振り返つたが、御坂妹では無かつた。もちろん自分でもない。

「私の能力は、エレキジエネレスト発電能力者相手には若干不利ですから。ここは素直に仲間を呼ばせてもらいました」

何だ……？ と辺りを見回し、上条はようやく気付く。

上条と御坂妹は、多数の銃口を向けられていた。

いつの間にか別の路地裏から出てきたらしき黒装甲服達。それぞれが皆銃を構え、上条と御坂妹に照準を合わせている。それを見て、上条は舌打ちすると後ろへ下がった。

(やばいな、これ)

自分の能力はイマジンプレイカー幻想殺し。あらゆる超常現象を打ち消すその右手は、超能力相手になら絶大な強さを誇る武器だ。だがその弱点は、銃弾のような普通の攻撃。

ただの鉄の塊は、イマジンプレイカー幻想殺しで無効化することは出来ないのだ。

それにこの大人数。

路地裏のケンカを例に持ち出すことが出来ない状況だ。もしこの能力者の青年とだけ1対1で戦うなら勝機はあるが、自分達の周りを囲むほどの人数に勝てるとは思えない。

(どうする)

上条は隣の御坂妹に目をやった。彼女はなかなか優秀な電撃使いエレクトロマスターだが、病院に通う怪我人である。本来は外出も許可されていないの

だ。彼女に能力を使わせる訳にはいかない。

圧倒的なハンデを前に、上条はもう一度舌打ちした。

(どじする！)

その時。

「アンタってホントにいつつも不幸なのね」

どこからか、聞き覚えのある声が聞こえた気がした。

途端、ズガッシャアア！！ という音と共に莫大な閃光が目を奪い、一部の黒装甲服が反対側まで吹き飛ばされた。その後を追うように、さらに光の矢が走る。

「何だ……？」

上条と青年は同時に呟いた。

その疑問を解消するかの如く、閃光の向こう側から誰かが歩いてくる。

見覚えのある声に、常盤台中学の制服姿で現れたのは、

御坂美琴だった。

「……あれ？」

上条はぼかんとした声を出したが、美琴の方は『あーもーかったるいんですけど』的な動作で髪を掻き上げる。

「いいトコでいつも邪魔ばかり入られて。見てらんないわよ」

「あー」

上条は中途半端な声で応える。

「おまえ帰ったんじゃないの？」

「帰るわけないでしょうがッ！」

ズガン！　といきなり雷撃が飛んだ。うおわ何で俺が雷撃受けなきゃいけないんですかーとやや涙目で訴えつつ、でもしっかり雷撃は防いだ上条を見て、美琴は呆れたように息を吐く。

「私の大事な妹のことなのよ？　その辺に放つたらかしておける問題かっつーの」

じゃあ何でどっか行つたんだよ、という疑問が沸いてきた上条だが、それを問うのは後にすることにした。

振り返る。青年にさっきまでの余裕は消え、一歩足が引いていた。

そんな様子を見て、再び美琴に向き直ると、上条はニヤリと笑う。

「じゃ、手貸してもらっぜ、御坂」

「……ふう」

檜橋は一息つくくと、体の力を抜いた。

壁と檜橋とに挟まれて押さえつけられていた少女の体が、ずるずると床に滑り落ちる。

「……にしても、まさかまったく動かないとは思わなかったよ」

少女を見下ろして、呟く。

檜橋の持っていた風の刃はすぐ脇の壁に突き刺さっている。そのうち、能力も解けて消えるだろう。

檜橋は少女の上にかがみ込むと、呼吸を確かめる。規則正しい息を感じて、檜橋はほっと安堵した。脈を確かめてそれが正常であることを確かめると、またさらにほっとする。

あの時檜橋が少女にした攻撃は、ただの体当たりだったのだ。ただ、今までの人生であんなに強い体当たりをしてみたのは初めてなので、呼吸器とか内蔵とかを潰していないかとても心配だったのだが、どうやら平気なようだ。

「よいしょ」

とりあえず少女の姿勢をキチンとした仰向けに正す。それから、どこも怪我のないことをもう一度確かめると、榎橋は立ち上がった。

「ミサカ、起きてるか？」

声をかけてみるが、まともな返事は返って来なかった。ただ、呻くような音が聞こえた。

榎橋は今度はミサカの脇にかがみ込むと、その頭を少し起こす。

「聞こえてる？」

「……い」

「まあそれはいいや。一つだけ言っとくことがあるんだけど」

「……何ですか、とミ……サク、は」

ミサカの意識は戻っていた。ふらふらと危ない視線は、どこを見ているのか見た目では分からないが、ミサカは自分のことを見ていると榎橋は感じた。

「救急車を呼ぶから」

「……きゅ」

「調整がどうかかそういう問題は二の次で、だ。まずはおまえを絶対病院まで連れて行くからな」

話そうと努力するのを止めて黙ったミサカは、どうやら逡巡しているようなのが見て取れた。しかし、やがてミサカは榎橋の手にやっつと伝わる程度の微かな頷きを返した。

榎橋は、ミサカの頭を支えていた手を静かに下げると、ミサカを元通りの姿勢にさせた。あまり動かすのは良くないだろう。榎橋は今携帯電話を持っていないので、辺りに公衆電話でも無いだろうかと思ひ、研究所を出ようとした。

しかし。

「止まってもらおうか」

背後から、新たな人物の声がかかった。

榎橋は足を止め、振り返る。そこに立っていたのは、無骨な作業服を着た筋肉質の男だった。

しばらく無言で相手のことを眺めていた榎橋は、やがて口を開く。

「あんたが黒幕か」

「その通り」

「やっぱりな。あの子みたい迷ってる人間が、計画を進めるわけがない」

言いながら、櫛橋はミサカの盾となる位置に移動した。

「おまえはミサカを使って何をしようとしてるんだ」

「それ、というよりもその頭の中がな」

男はつまらなそうに答える。

「どうせ聞いたところで、君には賛同できまい」

「いいから言えよ」

「……」

男は黙って櫛橋を見返した。櫛橋は負けじと睨み返す。気力で負けるつもりなんて無い。

やがて男は答える。

「妹達シスターズを利用した、能力者へのちょっとした細工だ。AIM方面からのな」

「細工？」

「そつだ。とある研究員がその個体に爆弾コードを入力したという情報を俺は極秘に手に入れた。それを利用して、全世界の能力者に干渉する巨大な能力妨害システムを作り上げるわけだ。いわば能力破壊コードの作成だな。そのコードが発動した以降、まず能力は使えなくなるだろう」



何だつて？ と榎橋は自分の耳を疑った。

だがそれを疑問に出す前に、男は続ける。

「そのために妹達のその個体を狙っていたわけだが……しかし貴様も運が悪いな。そのこの火炎発射に任せておけば、12057号も命を落とさずに済んだだろうに。俺は早くコードを手に入れるためなら目標の命などは捨てるとも」

命を捨てるという、その言葉に、榎橋は身を固くした。

そんな榎橋の前に、男は表情も変えずにこう告げる。

「本来、妹達のデータコードにアクセスするためには専用の機器が必要らしいが、俺にはそんなものを用意する伝手はない。別のものに資産を回してしまったしな。ここは直接脳を開いてアクセスさせてもらうとしよう。まあ、運が良ければ命は助かるかもしれないが、間違いなく崩壊しているだろうな」

「おまえ、なあ……」

噛み締めた奥歯がギリツという音を立てるのを、榎橋は確かに聞いた。この男は、人の命に関わる話をしているというのに淡々と告げていく。その気軽さが許せない。

「何様なんだよ！」

榎橋の怒号に、しかし男は顔色一つ変えない。

「おまえは何のためにそんな計画を企んでるんだよ！ ミサカの命

より大事な計画なのか！ 言ってみろ！」

「騒ぐな」

男は気怠そうに言った。

「知りたければ教えてやろう。貴様は、この学園都市でどんな悲惨な実験があつたか知っているか？」

「知らねえよ」

「……平和な奴だ。いいか、この街の暗部では、法と常識を遙かに超えた実験が行われていた。毒物を飲まされたり、脳を切り開かれたりなんてのはまだ軽いもんだ。ではもう一つだが、貴様はその被験者に誰が選ばれたか分かるか」

この答えは、なんとなく予想がつく気がした。

「置き去り、だろ」  
チャイルドエラー

「そうだ」

置き去りは、学園都市で大きな問題になっている。このまま件数が減らないならば、いつそ置き去り専用チャイルドエラーの施設を増やすかどうかという論議までに発展しているのだ。高位の能力が目覚めた者はまだましたが、たとえば無能力者の子供はただの金食い虫だ。そんな風に考えた研究者は、別の方法を考えついたのだろう。

「日夜、置き去りチャイルドエラーを使つたおぞましい実験は続いていた。被験者は怖くても反抗できないのだ。なぜなら、それがそのまま家を失うこ

とに繋がるからな」

世界の違う話だ。

榎橋はそう感じた。とても、ついて行ける範囲ではない。

「そんな中、俺と俺の妹もまた被験者だった」

「妹？」

榎橋は繰り返すと、ちらりと気を失って倒れている少女の方へ目をやった。

だが、男は割り込むように言った。

「違う、そいつではない。俺の妹は死んだ」

「……」

「実験のせいだ。俺は思ったわけだ、この世界は間違っているとな。学園都市なんてものは腐っている。表面上は何事もなくても、内部はボロボロだ。ならば学園都市を潰せば、結果的にこの世界の子供の幸福に繋がる」

そこで話は終わった。

黙り込む榎橋を見て、男の方はどうするべきか少し考えたが、

「ふざけてんのか」

その一言で意識は再び外に向いた。

「いいや、大真面目だ」

「なら頭おかしいんじゃないのか」

櫛橋はそう吐き捨てると、再び目の前の男を睨みつけた。

「おまえが学園都市の実態を知ってて、壊した方が良くって思うことについては、俺はなんとも思わない。たぶん無理だろうから。だけど、だからってミサカに何をしてもいいなんて理由にはならないだろ。何を考えてんだよ。能力者全員の能力を封じるとか、ミサカネットワークを支配するとか、どんだけ自分中心に見てんだよ。そんなものは1人でやってろ。誰かを巻き込むな。それこそ、その計画が一番腐ってるだろうが」

「なん、だと」

「それに言ったな、「学園都市を潰せば子供の幸福に繋がる」……くだらない台詞だよ。学園都市で生活することが幸せな子供は？能力を磨くことに日々努力してる子供は？結局はおまえがしたいようにしてるだけだろ。いい年してそんなことにも気付かねえのかよ。1人で刃向かう勇気が無いくせに偉そうに騙ってんじゃないよ、この腰抜け」

「……言いたい放題だな」

ボソリという言葉と同時に、男の全身から見えない圧力が吹き出した。それは<sup>ファイアランチャー</sup>火炎発射の少女とは比較にならない、圧倒的な重圧。

「まあ、貴様には理解できないことだろう。それでいい。理解した

なら、貴様を殺す理由がここで一つ増えるのだからな」

「調子に乗んな！！ 人の命をなんだと思ってるんだよ！！」

ついに怒鳴ると、檣橋は暴風と化して男へ突っ込んだ。あたりのスチールデスクさえも動かす風圧に、檣橋はただ身を任せ、風の凶器を再び手に、突撃したのだが。

フツ、と。

唐突に、その風が消えた。

明らかにおかしい能力の異変に、檣橋は戸惑って足を止めたが。

「前を見る」

ゴスツ！！ という打撃音が炸裂し、檣橋の体は何メートルも吹っ飛ばされた。

床に叩きつけられた檣橋は、咳き込みながら何とか起き上がる。相手が放ってきたのはただの蹴りだが、その威力は凄まじかった。

おかしい。能力の制御を間違えたつもりなど無かったのだが。

そんな様子の檣橋を見て、男は簡単に言った。

「不思議に思うことはない。俺の前では、どんな能力も無効化される」

そう言うと、男はわざわざ袖をめくり、機械で出来たりストを檣

橋に見せた。

「この機械は独自に開発したものでな。装備者の意志に応じて反応する。動作は要らない。これもA I M拡散力場を利用した機器だな。さっき言った資産が足りないというのは、これを作っていたからだ」

説明をされても榎橋には実感が湧かない。すべての能力を封じる道具など、そんなものが存在するというのか。たとえ目の前で見せられてもそれは信じられない。

「疑わしげな顔だな。たった今証明して見せただろうに」

男は言うと、また袖を戻して腕を覆った。

「まあいい。その疑問は墓まで持って行け」

ダゴン！！ という壮絶な踏切音が響き、その動きに反応する間もなく、榎橋は再び殴り飛ばされていた。ガツーンとモロに頭をぶつけ、視界が明滅する。

速すぎて、能力を使うと思う暇も無かった。

「そのまま動かずにいろ。そうすれば終わらせてやる」

とても不穏な言葉を吐きながら榎橋の方に向かう男の影。榎橋は出来るだけ動こうと両手をついたが、上手く力が入らない。その結果、こちらに来る男と向かい合う形になってしまった。

と、男の足が何かを蹴飛ばした。

榎橋の方だけを見ていた男は、最初何を蹴ったのか分からなかつ

た。

視線を降ろすと、そこには、気を失った部下の少女が。

「邪魔だな」

男はそう言うと、榎橋が何かを言う間もなく、

少女の胸倉を掴みあげ、そのまま手近なコンクリ壁に叩き込んだ。

ドツガアアアアアン！！ と本日最大の破壊音が響き、少女の体は壁と灰色の粉塵の向こうに消える。

その光景を理解するのに、榎橋は1時間くらいかかったような気がした。

「お、ま ふざっけんなアアアア！！」

生身の人間が、コンクリートにそれを砕くほどの勢いで激突したりなんかしたら、どうなるかは嫌でも想像がつく。榎橋は怒りのあまり我を忘れかけた。

あの少女だって、いつか表の世界に出るとい目標があったはずなのに。

この男は、何を平気な顔で他人の夢を踏みにじっているのか。

故に、榎橋はもう防御は考えず、相手にぶつけることだけを考えて能力を発動させた。破片が空を裂き、暴風が辺りを吹き飛ばす。そんな中、男は動きもせずに榎橋を眺めていた。

「何を怒っている。あのガキは貴様の敵だろう。煩う必要も無い」

軽い言葉と、軽い蹴り。

それだけで、檜橋はあしらわれるように吹っ飛ばされた。

全身に激痛が走り、関節から嫌な音が聞こえる。頭の疼きまで最高潮に達していたが、それら全てに負けないほど、檜橋の気力も最高潮だった。

（許さない。おまえみたいな人間のためにミサカが犠牲になるなんて、それが一番間違ってたよ！）

痛む体を押しして、檜橋は立ち上がった。

どうして自分がここまで必死になれるのかは分からない。分からないが、自分の目の前で知り合いの命が危ない事件が起こっているのに、知らないフリをする奴なんかいないだろう。

「まだ立つか」

呆れたような声が聞こえたが、檜橋は無視して突っ込んだ。

途端に弾き飛ばされるが、それでも構わない。痛みが何だ。体が悲鳴を上げるが、それが何だと言っただ。

諦めてたまるか。

1人の少年は、少女を救うために、動けなくなって負けを認めるよりも、挑み続けることで負けを認めないことを選択した。



( 止められるもんなら、止めてみる )

一番大事な心の柱には、折れるどころか傷すらついていない。

### # 13 戦いの終焉 The | s e c o n d | c l a s h

轟音が響いた。

(……………)

鼓膜が破れるような音だった。

少女は薄く目を開ける。状況を一目見ただけで、彼女にはどんな状況かが分かった。

自分を壁ごと叩き壊したボスト、そんな行為に憤る少年。

それが見えたのは一瞬で、辺りはあつという間に灰色の粉塵で覆われた。

捨てられた、と分かったが、大した感傷も浮かばなかった。自分はそういう風に使われてきたんだから。その上、最後にあの少年が、自分のために怒ってくれたところが見れて良かった。

それにしても。

死ぬというのは案外あつけないものだ、と少女は思った。痛みも何にもない。溺れ死んだりするとかかなり苦しそうだと思うが、自分はそんな死に方ではなくて幸せだ。

そんな風に考えていた少女の背に、何かがぶつかったような感覚が伝わった。

(え?)

少女は驚いて起き上がる。というか、体は起き上がった。どうしてだろう、と疑問が浮かぶ。もしかして、死んでも感覚は残るのだろうか。

疑問に答えるように、灰色の粉塵は並みが引くようにサーッとどこかへ流れていった。

そして、彼女がまず見たものは。

「あーあー、ホント面倒くせエわ。あんな野郎、背後から急所ブチ抜きやさつさと終わんじやねエかよ。なんでこの俺がこんな雑用に回んなきゃいけねエンだ」

「まあまあ、今回の主人公はあの檜橋とかいう人と12057号の二人なんだから、ってミサカはミサカはとーっても不機嫌なあなたを和ませるべく様々な動作を駆使してみたり」

学園都市最強の能力者と、量産能力者妹達の最終ロットという、でこぼこコンビだった。

「オマエのその動きは余計に苛立ってくんだよ。あんまり煩わしいと両手足縛ってその辺に転がしとくぞ」

「だーからー、そんなに不機嫌にならなくっても　ミサカはミサカは縄縛の危機を回避するべくキチンと気をつけしてみたり！」

なんでこんな場面にこの二人が、と少女は驚きと呆れとが混ざった眼差しで二人を見た。

システムズ妹達の方はまだ分かる。でも、ここで学園都市最強の能力者が出てくる必要は無いのでは？

その学園都市最強である一方通行は、アクセラレータコンクリートの壁に何気なく手を当てていた。

アクセラレータ一方通行の能力はあらゆるベクトルを制御・操作するという能力で、少女もそれを知っている。もしかしたら、痛みも衝撃も全く感じなかったのは、このせいかもしれない。

少女は改めて周りを見てみた。

ここは研究所のすぐ隣の路地だった。自分は壁を突き破ってここまで飛ばされたわけだ。何度も見ている普通の路地裏……だった。言い争ってるみたいな二人組を除いたら。

「おい」

と、考え事をしていた少女の耳に声が届いた。

見れば、件の一方通行アクセラレータだった。

彼は、ゆつくりと少女の胸倉を掴みあげると、完全な脅し口調で訊いた。

「あのクソ野郎の弱点は何だ。……そうだなア、あいつが付けてたリストの壊し方でもいいか。まあ、そういう情報をなんか吐け。でないとここで挽肉にしてやる」

「怖がらなくても、一方通行は演技して脅してるだけだから大丈夫

だよ、ってミサカはミサカは暴露してみたり」

黙ってるクソガキが！ と振り向いて怒鳴る一方通行だが、打ち止めは臆することなくすぐ横まで歩いてくると、今度は彼女も少女のことを見つめた。

「まあそれは置いといて、ミサカはあの人達を助けたいから、知ってることを教えてくれない？ ってミサカはミサカは両手を合わせて小首を傾げて可愛らしくお願いしてみる」

「……だからソレは腹立つただけだっつってんだろオが」

突っ込みが入り、打ち止めは首を傾げていたのだけ直した。ただし目は逸らさないまま、じっと少女のことを見つめてくる。

「……あのリストの弱点は、奇襲攻撃、つまり意識できない場所からの攻撃だよ。あの道具は、気付いた能力ならどんなものでも防げるんだけど、気付いていない能力は防ぎようがない。だから、死角からの攻撃で壊せばいいんだけど」

少女は呟くように言う。その声があまりにも小さくて、自分の声じゃないような気がした。それは、今は違うとしても、上司であった人の弱点を言うのは忍びないという罪悪感か。

でも、そんなことを思っているから、自分はいつまでも踏み出せないんだ、と少女は思った。

当然ながら少女の考えることなど知らない一方通行は、少女の胸倉を掴んでいた手を離す。

そうしながら、ラストオーダー打ち止めと顔を見合わせた。

「だよ。早くあいつに教えてやれ」

轟音が響いた。

その音は、自分の体の中からも響くような気がした。

「……………ぐっ……………」

壁にもたれて座り込むような格好で、榎橋は浅く息を吐いていた。

勝算なんて無い。

こうして相手の気を引いている間に、ミサカが自分で逃げてくれればと思ったのだが、それを今のミサカに期待するのははっきり言うて酷だ。

だから、この男が疲れて倒れるまでは、自分も止まるわけにはいかない。

「いつまで虚勢を張っている。それはそれでなかなか見物だが」

だが、男は一向に疲れた様子を見せない。

もちろん、何の訓練も積んでいないただの中学生である自分と、おそらくは幾多の戦いをくぐり抜けてきたこの男とは、レベルが全然違うのだろう。だからさっきからこの男は余裕の姿勢を崩さない。

知るか、そんなもの。

榎橋は自分を奮い立たせるように言い聞かせると、立ち上がろうと体に力を込めた。

しかし、

「やめておけ」

敵である男は、榎橋の服を掴むとそのまま後ろへ放った。それだけの動作だが、既にかかりのダメージが蓄積されている榎橋にとつて、体が破裂したくらいの痛みだ。

もう、受け身が受け身としてすら機能しない。

「ひとつのものにかけるその信念は見上げたものだが……生憎と、俺が持っているものと大して変わりはない。俺も、今も昔もひとつのもののために動いている」

だから知るかよ、そんなもの。

榎橋はそう突っぱねた。もしかしたら微かに呟いていたかもしれない

ない。

睨みつけてくる榎橋に、男は疲れたような息を吐いた。

「まったく、しぶといを通り越した野郎だ、貴様は。だがそろそろくたばるといい」

ゴツ！！ と、風を切る音と踏み切る音が混じり合った危険音が鳴った。ラストコール

かわせないと感じた榎橋は、偶然手に触れたものを手前に突き出す。

それはただの軍用ゴーグルだった。ガラスのひび割れがひどいことになっていてそのゴーグル。威力も何にもないただの物品だが、榎橋が勢いよく突き出したことで、男の動きを僅かに止めることが出来た。

その瞬間に、榎橋は全力で横へ転がる。

ダン、と男の足がさっきまでの榎橋の心臓の位置を踏み潰した。

「無駄なあがきという言葉の意味を知っているか」

榎橋の全身が、転がった先で何かとぶつかる。

それはミサカだった。

抗い始めた出発点へ、見事に追い詰められた。

「最後に遺言を残す時間が欲しいか」



完璧に勝利を確信し、舐めた発言に、榎橋は答えなかった。

「ふん。まあ無ければそれで良い」

男はそう言うと、足を振る。

ブオンという風切り音は、二人の体ごと潰すべく襲いかかる蹴りの音だ。

だが、その危機を前にしても、榎橋は言葉はおろか、身動き一つ取らなかった。

バチン。

響いた音は、体を潰す音ではなかった。

小さくてあっけなくて間抜けな、電撃の音だった。

ピーッ！ という甲高い音がどこからか響く。

カチャ、という何かの外れる音がどこからか響く。

そして。

ギョオツ！！ と、吹き荒れた暴風に、男の体が吹き飛ばされた。

(何、だ……？)

彼は自分の腕に目をやる。

そこには、あるはずの機械が、ちゃんとあった。

ただし、ショートして、使い物にはならない状態で。

「助かったよ、ミサカ」

部屋の向こう側から、少年の声が聞こえる。

「終………  
終わらせる」

すっ、と立ち上がる音でした。

(くそ)

あの能力者は、能力が使えるようになればもう自分では歯が立たないだろう。

それは敗北に直結する。

(俺には目的があったはずだ。妹のために。あいつの忌まわしい思  
い出を全部ぶっ壊すと決めたはずだ！)

「ぐ、おオオオオオアアア！」

計画を、ここで終わらせるわけにはいかない。

榎橋はミサカだけを見ていた。

まさかあそこで、リストを破壊するとは思わなかった。そんなことが出来るとも思えなかったし、何よりミサカは瀕死状態だ。向こうもそう思っていたからこそ、ミサカの電撃なんかには注意を払わなかったのだろう。

と。

ミサカの頭が、僅かにこちらを向いた。

目と目が合う体勢になる。

その時。

榎橋は、はつきりと感じた。

表情や言葉ではなく、その場の雰囲気だけで。榎橋には、ミサカが微笑んでるように感じられた。

「助かったよ、ミサカ」

彼も、同じように返す。

「終わらせる」

立ち上がる。痛みなんて気にならなかった。体力はもう1も残ってないだろうし、足下がふらふらしているのも分かった。

それでも、ラスボスを倒さないことには、クリア終わりは無い。

「ぐ、おオオオオアアアア！」

向こうから、雄叫びのような声が聞こえた。対し、榎橋は何も言わずに駆けた。

互いの距離が縮んでいく。

結局は二人とも、あの少女に言われたように、自分のためだけに戦ったのだ。

だけど、その何が悪いと榎橋は思った。

結果として、誰の命も奪うことなく、事を終えられたのなら。

そこであの少女を思い出し、榎橋は胸が痛んだが、それは封じ込むことに決めた。

敵まではあと2秒。

味方である空気を武器に、榎橋は一番奥へと踏み込む。

「もう一度、考えて来いよ      あんたが本当にやりたいことを！」

そして、二人は激突した。

## # 14 帰路 Each | line | parts

半分路地裏で、半分普通の道のそんな道路に。

謎の黒装甲服達と、謎の帽子青年が倒れていた。

黒装甲服を倒したのはすべて美琴だが、帽子青年はしっかり上条がぶん殴っておいた。ま、だから何だと言われればそれまでだが。

そんな感じで、上条達は包囲網を突破したわけだが。

「あーなんか爆音とか止んでるし！ これちょっとピンチじゃねーの！ つつか御坂、こんなところに加勢してる暇があったらあっちに加勢してやれば良かったんじゃない」

この声为上条ので、

「うつさいわね！ アンタって人間は恩義とか感じないの！？ アンタら、あの後私が入らなかつたら絶対蜂の巣になっていたんだからねー！」

この声が美琴ので、

「……お二人が善戦している中、全く役に立つことの出来なかったミサカは少々真剣に落ち込みます……」

このやたら暗い声が御坂妹のだ。

三人は、黒装甲服達を遠慮無く飛び越えると、研究所の入り口へ

走る。

正直言って、上条はととても不安だった。

(やっぱり自分が関わってないとしても心配になるのはこれ俺の悪い癖だよなー)

まあ、もし心配にならなかつたら、今ここに美琴と御坂妹はいなかったかもしれないわけだが、その辺のことには頭が向かない上条である。

研究所の正面に回り込んだ三人は、そのまま絶句して動きを止めた。

何だか、怪獣でも突っ込んだかのように、入り口の扉らしきものがその枠ごとひん曲げて中に飛ばされている。

「これ　　マズいんじゃねーの！」

叫び、研究所の中へ飛び込もうとして　　上条はいきなり足を止めた。

その背中に、どん、ばんと美琴と御坂妹がぶつかる。

「ち、ちょっとナニ急に止まってんのよ危ないでしょうが！」

美琴の怒った声に、上条は応えず、ただじーつと研究所の中を凝視している。

「これって……」

やがて上条は振り向くと、二人が見えるように場所を空けた。中を覗いた二人は、上条と同じように硬直する。

中の様子が暴風警報発令時みたいになっているのもそうだが、中にいる人間が人間、みな気絶して倒れていた。

御坂妹だけ見覚えのある少年と、全員が見覚えのあるミサカ12057号と、全員が見覚えのない筋肉質の男、それぞれが思い思いにぶっ倒れている。

やがて、上条は長い溜息と共に肩の力を抜いた。

「なんだ……走って損した……」

へたり込みそうになる上条に、シャキッとしなさいだらしない！と美琴が電撃をいくつか突っ込む。そしてその横で、何だか暗めな御坂妹。

そんな面子に声がかかった。

「ああ、貴方達も来ていたのですね、とミサカは戻って早々に話しかけます」

入り口から目を離し、横に向けると、どうやら別個体のミサカが立っていた。

「あれ、おまえは……まあ何号でも良いか。で、戻ったって？」

「ミサカは13577号であり他の個体ではないので、どうでも良くはないのですが、とミサカは間違った見解を正すべくにじり寄りつつ答えます」



「はい、悪かった」

「ミサカは先程、救急車への連絡のためにひとつ走りしてきた次第です、とミサカは報告します」

そこまで言うと、ミサカ13577号は御坂妹の方へ顔を向けた。

「何故あなたが悄気きつているのかミサカには理解できませんが、とりあえずあのカエル医者に見つかる前に病院へと戻った方がいいでしょう、とミサカは提案します」

そんな提案を受けた御坂妹は、ちらりとここにいるそれぞれの顔を眺めた後、

「……結局、ミサカはいつたい何をしに来たんでしょう……」

みたいなことを呟きながら行ってしまった。

何って、ミサカ12057号を助けるためだろ？ と上条は思ったのだが、上条には分からない女の子の悩みでもあるのかもしれないと思ひ、言うのを止めた。

そうして、再び研究所の中に視線を移す。

今回の物語の主人公達は、それぞれ加勢が無くとも無事に問題を解決したようだ。

……そう考えると、急に脱力感が全身を襲ってきた。

「……はあ、何か晩飯作るどころか食べる気力まで無くなつてきちまつたよ……」

「ちょ、ちょっとアンタ思いつきり脱力しかけてんじゃないわよ！」

「おお、ミサカの愉快な仲間達がいるよ、ってミサカはミサカは報告してみたり」

研究所ではない、別の建物の影から、通りを覗いていた打ち止めラストオーダーが言った。

「そオカよ。なら行って旧交を温めでもしてこい」

投げやりな一方通行アクセラレータの台詞に、打ち止めラストオーダーはちらりと振り返ると、

「まー、ミサカが行ったらあなたは寂しくなっちゃうし、ってミサカはミサカは可愛く指摘をしてみたり」

「……」

「あれー黙っちゃって凶星ー？ 一方通行アクセラレータって実はとっても寂しが

りやさんなんだね、ってミサカはミサカは挑発してみる」

「……殺す」

「え？ ちょちょちよ待つて！ 止まって！ ミサカはミサカは決して悪気は無かったんだよって弁解してみ」！

そんな二つのグループからさほど離れてはいないところに、少女は仰向けで倒れていた。

どうやら、計画は失敗に終わったようだ。

少女はゆっくりと体を起こす。

痛むところは特に無かった。たぶん、あの少年はかなり手加減してくれたのだろう。

腕などを動かして調子確かめつつ、少女はこれからのことを思った。

自分はもう、組織から捨てられた人間だ。

表に行ったところで、誰も狙わないだろう。

そう思うと、なんだか嬉しいような悲しいような複雑な気持ちがありました。

さて。

表の世界へ出るといっても、まずはどこへ行けばいいのだろう。

……。

少女はそこで思考を止めた。分からない。なら、聞きに行ってみよう。

誰かに助けを求めたら。

そんなフレーズを頭の中で反芻しながら、少女は立ち上がる。

熱い。

ぼんやりとする意識の中で、ミサカはそう感じた。

体中が焼けつくようだ。

ミサカは少しだけ頭を動かしてみた。

側には、少年が倒れている。

この少年は、さっきのミサカの合図を受け取ってくれただろうか。たぶん分かってくれただろう。返してくれたんだから。

ミサカはチリチリとした熱さと痛みを感じつつ、少し体を動かしてみた。

途端に、痛みが体を駆け抜ける。

やっぱり静かにしていよう、とミサカは再び寝た格好に戻す。

そしてちらりと、また少年に目をやる。

この少年が倒れている理由は、きっと打撃の衝撃ではないだろう。今までずっと耐えたダメージに負け、過労という形で倒れたのだ。

少年は、そこまですてミサカのことを守ってくれた。

いたんだ、とミサカは思う。

自分にも、こうして命を張って助けに来てくれる人が。

……なんだかさらに体中が熱くなってきたような気がした。

それと同時に、ミサカは覚悟を決める。

ウイルスコードを消してもらって、他人の記憶を受け入れて、早く調整を終わらせて、

そして、またこの少年と一緒に歩こう。

ミサカの耳に、くぐもった、救急車のサイレンの音が聞こえてきた。

何だろっ、瞼がやけに重い。

榎橋はそう感じた。

開きたいと思うのに、言うことを聞かない。

体中が痺れているかのように、瞼だけでなく、指も首も動かない。

目よ開け、と榎橋は馬鹿げた呪文を口の中で唱えてみた。

それもまた、言葉として発せられたかどうかははっきりしない。

だんだん、だんだん、石でも乗っけられたような重圧が腹の辺りに加わっていく。

( いいから目を覚ませ！ )

そう、体に命じた。

にー。

「……はっ」

唐突に、榎橋は意識が戻った。まるで深い海の底からいきなり引き上げられたかのように、当初榎橋はクラクラしていたが、やがて

辺りを見ている。

なんだか、暗いのに明るい部屋だった。

カーテンやドア、ベッドシート、天井の色。すべてが白色で、それが月明かりを反射して部屋を薄明かりの下に置いていた。

「病院、か……」

あのあと、誰かが救急車を呼んでくれたんだろうか。

ぼんやりと考えていた檜橋は、腹のあたりに重みを感じた。

何かと思って見れば、そこではしろねこが気持ち良さそうにゴロゴロしている。

「そっだ、ミサカは」

動けるわけでもないが、そう呟いてしまった檜橋に。

「ミサカならここにいます、とミサカは返答します」

なんと返答が返ってきた。

ベッドの横で、見舞客が座る椅子にミサカは座っていた。

冷静に落ち着いて考えれば何てこともないだろうが、檜橋は驚いて心臓がひっくり返るかと思った。

「うわぁー!」



「しつ、夜の病院ではお静かにお願いします、とミサカは告げます」  
「なんだか看護師さんみたいな台詞を言うミサカ。そのミサカの方に、榎橋は改めて視線を向けてみる。

よく見れば、包帯やガーゼがあちこちに貼られていた。

「び、びっくりした……。脅かすなよ」

「急に大きな声を出したあなたの方こそミサカは驚きました、とミサカは反論します」

「けど、おまえ動いて大丈夫なのか？ あんな瀕死の状態だったのに」

「現に動いてここまで来ているミサカと、たった今まで意識の無かったあなたを比べれば、どちらが危険かは一目瞭然です、とミサカは回答へのヒントを差し上げます」

「そうですね……」

会話が止むと、辺りはシーンとした静けさに包まれた。

榎橋は何だかとても眠くなってきたが、まだ聞いていない重要な話がある。それを聞くまで、寝るわけにはいかない。

「おまえ、これからどうするんだ？」

率直といえは率直で、遠回しといえは限りなく遠回しなこの質問に、ミサカは少し黙った後に答えた。

「実は、ミサカは既に最終信号ラストオーダーのところへ行ってきました」

「は？」

「そこでまず、ウイルスコードを取り除いてもらおうと考えたのですが」

ミサカはそこで言葉を切る。

おまえ、あんなに嫌がってたじゃんと榎橋は突っ込もうかと思っただが、止めた。ここは余計な口を挟むべきじゃないと雰囲気を感じた。

何か言いづらいことでもあるのか、ミサカはなかなか切り出さない。

「どうしたよ？」

そこで榎橋の方から促してみた。

ミサカは、ちらりと榎橋を見ると、

「実は、ミサカの頭にはウイルスコードなんて存在していませんでした、とミサカは事実を報告します」

一気に言った。

「はい？」

「ミサカの頭の中に異なるコードが組み込まれていたのは確かで、

それによって覚えたはずの記憶に漏れが生じるなどの欠陥があったのは確かですが、問題のコードは極めて危険度の低いもので

「はあ!？」

「簡単に説明をすると、ミサカの頭の中のコードは書き換えられた場所が合計で10あり、コードを順番に流した時の異変順に1番目、2番目、10番目、5番目、7番目の文字を抜き取ると、A、E、E、U、S、つまり『妹達を用いた絶対能力進化実験《Absolute Ability Evolution Experiment that Uses Sisters》』のそれぞれの頭文字となるわけで、つまりこれは単なるお遊びのコードであり問題はなく、あの組織には間違った情報が渡ったことに

榎橋は、懇切丁寧な説明の半分も聞いていない。

「はあああゝ!？」

さらに詳しく補足すると、データコードを書き換えるのはなかなか難しい作業で、ひとつでも変な箇所があつてしまうとエラーとなりその個体は停止するので、コードを変えても平気な部分かつ「AEUS」と並べることが出来たミサカ12057号というのは、ある意味奇跡の個体でもあるのだが榎橋にはそんなことはどうでもいい。

ですから病院では静かに、というミサカの抑えも聞かず、榎橋は好きなように絶叫する。

「何だ!？ じゃあおまえはそのくだらないお遊びコードのせいで命を狙われて、俺はそのお遊びコードのせいで病院送りになつたっ

てのか!？」

「そういうことになります、とミサカは」

「うばあああああ!！」

檜橋はしろねごと布団を吹っ飛ばすと、どこにそんなパワーがあるのか分からないほどの力で起き上がるうとする。その研究者ブッコロス! なモードの檜橋をなんとか抑えるべく、ミサカは必死にベッドに押さえつけた。

ようやく収まってきた檜橋からやっと手を離すミサカは、普段見せない程に激しく肩で息をしていた。

しかし、檜橋には気遣ってやる余裕は無い。

「本当に……何のために頑張ったんだ俺……」

思い切り脱力して、ベッドの上でタコみたいにへたれる檜橋。

ミサカはその答えが分かるような気がしたのだが、恥ずかしいし図々しいとも思うので黙っていた。

「それ、で? じゃあおまえは自分のままの記憶を持って、今ここにいるのか?」

「はい、とミサカは肯定の返事をします」

「そっか。……なら良かったな」

はい、とミサカが答えると、病室にはまたシーンとした空気が流れた。

後、大事なことは何かあっただろうか。

考えている榎橋よりも先に、ミサカが口を開いた。

「それと、ミサカは第10学区の病院、つまりこの病院に入院することが決まりました、とミサカはさらに報告します」

「え？ でも、データコードは問題ないんだろ？」

疑問に、ミサカはどっちつかずかな音を出した。全く問題ないわけではないが、かといって普通に生きていても支障はきたさない。

「データコード関連ではなく、ミサカの体の話なのですが、ミサカは投薬によって14日でこの体にまで成長した個体ですから、細胞の成長と劣化速度が異常に早いのです、とミサカは説明します。よって、まずはその薬の働きを取り除き、寿命を回復させるというための入院を他の妹達シスターズも行っていたわけです、とミサカは分かりやすく説明したつもりですが……」

「ふーんそうなんだー」

「その口調からするに全く理解していませんね、とミサカは胡散臭そうな目で睨んでみます」

睨まれているというよりは、じーっと見られているという感覚がした榎橋だが、あえて黙っておいた。

今度は沈黙が訪れる前に、ミサカが口を開いた。

「ああ、それから」

まだなんかあんの？ という檣橋の声を無視して、ミサカは何かを取り出してみせる。

それは、バツキバキに亀裂の入った軍用ゴーグルだった。

「……よくもまあこんなの拾ってきたな」

檣橋の呆れた声も無視して、ミサカは続ける。

「結局ゼロハンテープすらもらっていないなかったので、こんなひどい状態まで進行してしまいましたが、これはあなたのせいです、とミサカは告訴状を突きつけます」

「……あの、はい？」

「よってミサカが退院するまでに、この軍用ゴーグルを直してきてください、とミサカは宿題を出します」

「ちょっと待て！ なんかいろいろ引つかかるところがあるんだけど！ つつかこれ、おまえがしろねこに夢中になったせいで直せなかったんだろ！」

「……」

「わ、分かったよ分かりました！ 黙るなよ怖いから！」

そんな感じで、半分無理矢理に軍用ゴーグルを受け取った榎橋は、  
こんなんどうやったら直るんだよ……と首を傾げまくっている。

「しかし、実を言う并使用い物にならないまでに壊れたかと思っ  
ていましたが、案外砕けずに済みましたね、とミサカは独り言を呟い  
てみます」

独り言と明言したのだが、榎橋は軍用ゴーグルを見つめたまま適  
当に返事をしてきた。

「もう既に使い物にならないと思うんだけどな。運が良かったんじ  
ゃないか」

## 余談2

学園都市のとある一角、窓のないビル。

外と繋がるような、ドアや穴や通気口すらも無い一室に、金髪サングラスの少年は立っていた。

彼と向き合っているのは、『人間』アレイスター。

大人にも子供にも、男にも女にも、聖人にも囚人にも見える『人間』は、何の皮肉か、赤い液体の中で上下逆さまに浮かんでいた。

もちろん、金髪サングラスの少年にとっては見知った光景に過ぎない。

「それで？」

少年は尋ねる。だが、相手の『人間』は表情すら動かさない。

「内部・外部合同である一組織の計画は失敗、クローン量産型能力者にも影響は無し   「いったいお前は何をしたい？」

「それを聞いてどうするといふのだ」

「どうもしないぞ」

逆の問いに、少年はあっさりと答えた。

「ただ、妹を想って行動してきたあの頭を利用するのは、個人的に



気に食わなかったただけだ。結果があるならまだしも、最終的に何も変わらないのではな

「ふ」

対し、『人間』アレイスターは小さな笑みを漏らした。

「何も変わらない、というのは君自身の見解に過ぎんだろう」

「何？」

「ここで説明する気は毛頭無い。頭を絞って考えてみたらどうだ」

チツ、と露骨に舌打ちをした少年だが、どちらもそのことを気にした様子はない。

「人間の感情までも計画として操るとは、正直、オレはとてもお前が同じ人間とは思えん」

「元から思ってもいないのだろう」

「ああ、その通りだ」

そう言い捨てて、少年は背を向ける。タイミングを計ったかのよう<sup>テレポーター</sup>に現れた空間移動能力者に連れられ、少年はそこから消えた。

それから長いこと、部屋には機械の発する小さな音しか聞こえなかった。

やがて。

「やはり、規格外を動かすのはこれくらいが限度か」

……それは。

どんな意味を持って放たれた言葉なのかは、本人にしか分からない。

## # 16 街並みの空 The | future

空は綺麗な秋の色で、薄い雲がふわふわと流れていく。

街に目を向ければ、街路樹の葉は色づき、店頭の商品は取り替えられ、道行く人々はオータムカラーで身を包んでいる。

すっかり衣替えした街の中を、とある場所を目指して歩く二つの人影があった。

「んー、おまえ連れてくの初めてだよな。あいつは何て言うか……いや、どんな反応するんだろうな」

問いかける声。

「さあ？ 私は別にお見舞いに行きたいんじゃないんで、そのあと誠斗が夜ご飯奢ってくれるって言うから」

「……おまえ、ミサカに殺されるぞ」

二人は両方とも秋衣装だが、一目で誰と分かるような格好だった。片方はオレンジというか黄色っぽいセーターとスカート、もう片方は特に特徴のない普通の服装だが、髪型が寝坊した朝みたいにすこかった。

……まあ、実際寝坊したからそうなのだが。

「ねえねえ、その手の紙袋って何が入ってるの？ お見舞い品？」

今まで右を歩いていた少女の影が、腕を掴みつつ左側に移動する。そんな風にちょこまかと動きまわるのを見て、もう片方は溜息をついた。

「なに、なんでそんな疲れた溜息をつくの」

「実際、疲れてるんだけどな」

作り笑いのような表情を浮かべつつ、続ける。

「入ってるのは黒蜜堂のゼリーとプリンとムースか何か。先に行っとくけど病室についてからだからな。食うなよ」

「釘を刺さなくても分かってるよ」

膨れたように言い返す少女に、相手の少年はことさら疲れたような表情を浮かべる。

その表情のままに、彼は言った。

「昨日、家にあったケーキ丸ごと食っただろうに」

「う」

「おまえの誕生日なんだから少しくらい待てないのかよ」

「うう、違……あ、紙袋に別のが入ってるけどこれなに？」

超強引に話題転換した少女を見て、少年はもう疲れとか呆れを通

り越した表情を見せる。

「これはミサカの軍用ゴーグル。まあ、宿題とか言われてたんだけどな。昨日やっと直ったって連絡が来て、それで今日は届けようかと思って」

取り出された軍用ゴーグルは、ガラス面だけを器用に取り替えられて、さらにゴムや周りの金属部も綺麗に磨かれていた。新品同様に見える。

「こんなもの、もう役に立たないと思うんだけどな」

「役には立つよ」

え？ と少年が聞き返した途端。

「隙あり！」

軍用ゴーグルの方を意識していた少年は、左手から黒蜜堂セットの入った紙袋を容易く奪われてしまった。

「わーいもーらったー！」

「ちょっと待て！ 軽く言ってるけどおまえそれいくらすんのか分かってるのか！」

少女は聞く耳を持たずに、楽しげに駆けていく。

そんな当たり前だけど幸せな風景に、少年は僅かに微笑んだ。

「何やってんのー？ あ、じゃああと10秒以内に捕まえないとこれ食べちゃうからねー」

「だーかーらー待ちやがれ！ ほら後ろ向きに走ってないで！ せめて転ぶとか止めるよ！」

楽しげな子供達の声が、今日も平和な学園都市の空へ吸い込まれていった。

#16 街並みの空 The | future (後書き)

気空操動いかがでしたか。

誤字・脱字、その他変に思える点などありましたら善意の報告をお願いします。

あと物語上の疑問とかもありませんたらお気軽に。

それではまた是非続編まで書けるようにと祈りつつ、今回はここで筆を……とパクってみたいものですが、生憎と筆なんて握ってませんですね、はい。

代わりにキーボードを休ませようと思えます。

皆さん、お疲れ様でした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8110h/>

---

とある良運の気空操動

2011年6月29日12時12分発行